



冬の花

ナオニ

柗の花・・・序

「めぐみ、このお茶美味しいね」元夫、吉野聡二郎が言った。

「ええ、上海で買ってきたの。あなたへのお土産よ。結構高かったんだから」私が答える。

「上海へ行って来たの・・・」吉野は、空になった湯飲み、自分でお茶を注ぎながら言った。

「ええ。突然正巳に連れて行かれたのよ」そう言って私も、かつて自分のものだった手に馴染んだ湯飲みを口に運ぶ。

「五十嵐君と二人で行ったの？」

「ええ、でも、向こうで香港から来てくれた人が待っていて、ずっと通訳とかガイドとかしてくれました。上海って素敵な街よ。食べる物も美味しいし、夜景がとてもロマンチック」

「良いね、今度僕と一緒にしてくれるかい？」

「良いわよ。でも、あなた彼女とはどうなったの？」

「ちゃんと別れたよ。だって、このまま居てもどっちも幸せになんて成れないし。だったら、彼女だけでも幸せになって貰いたいからね」

「相変わらず勝手な言い分ね」私は少ししかめっ面をしてみせる。

「めぐみも相変わらず厳しいね。でも、それが一番良い方法だと思ったんだ。それに、別れ話は彼女が切り出してくれた」

「ホントにあなたも・・・」私は呆れて後が続かない。

「それで、上海には何をしに行ったの？」

「それが・・・」私は言いよどむ。

「また、例の件かい？」

彼は、霊的な話を信じたりしない。

「そうよ。大昔のカルマを終わらせに行ってきたの。それと、正巳との恋人ごっこ」

「五十嵐君とは、上手く行ってるんだね」

「恋人ごっこって言ったでしょう？彼とはごっこ遊びよ」

「可愛そうな五十嵐君・・・」

「あなたこそ、厳しいわね。でも、私なんかと恋をしたって、彼には何の役にも立たないわ」

「似たもの夫婦だったって言う事か・・・」湯のみのお茶を飲み干して吉野が言った。

「そうみたいね・・・。私達って、何処か欠けてる」

「まあ、それはそれで良いことにしようよ」

私は、久しぶりに元夫の家、半年前まで自分も住んでいた家に、上海のお土産として美味しいウーロン茶を持ってやって来た。

上海から戻ると、留守電に吉野からのメッセージがあったので、電話を掛けると、「君の好きな花が咲いているよ」との事で、久しぶりに足を運んだのだ。

郊外の小さな家。駐車スペースになっている庭の片隅、窓のすぐ下に、結婚した当時小さな柗の苗木を植えた。それがそこそこの大きさに育ち、葉の裏に隠れるように小さな白い花を咲かせはじめ、今では結構立派に花を付けるようになった。その花が、金木犀のように圧倒するような強さではないが、凛とした清楚な香りを漂わせている。

窓を開けると少し肌寒くなっているが、私はその香りを部屋に入れるために窓を全開にした。

「随分葉も丸くなったわね」私が外の柗を見ながら吉野に言う。

「もう、それを植えてから十五年ぐらい経つんだよ。君がクリスマスのリースを作りたいからっ

て買って買ってきたんじゃないっけ？」

「そうよ。あの時には、こんなに素敵な花が咲くなんて思ってもみなかったんだけど、五年目ぐらいに突然良い香りがし始めて、なんだろうって思ったら、花が咲いてたの」

「年と共に角が取れて、葉が丸くなるなんて、不思議な木だよ」

私は窓の傍を離れ、彼の前に座り直して言う。「私達はどんどん角が立ってきたのかしら？」

「僕はそうは思わないけど。だって憎み合って離婚した訳じゃないし、殴り合いの喧嘩もしたことがないだろう？穏やかなものだよ」

「穏やかに傷つけ合ったのかなあ」私が言う。

「僕が君を傷つけたかも知れないけど、君に傷つけられたとは思っていないよ。僕は僕自身によって傷ついただけ。君はどう？」

「そうね。よく考えてみると、私全然傷ついてなんて居ないのよねえ。確かに、それまで築き上げてきた結婚生活は壊れてしまったけど、私達の関係って何一つ変わっていないようにも思える。こうしてあなたと向かい合ってお茶を飲んでいるのだから、昔と全然変わらないもの」

「君の物はこの家から無くなってしまったけど。それと、君を愛しているのが僕一人じゃなくなった・・・」

「でも、結婚していた頃だって、私が知らないだけで、誰かが私を愛していてくれたのかも知れないわよ」

「君のその自信ってどこから来るんだろう？」吉野は大きくため息をつきながら言った。

「愛された記憶。それを手に入れたから・・・。それが現実であれ、幻であれ、私は確かに誰かに愛され、誰かを愛したの。それだけよ」

「それだけでそんなに自分に自信が持てるものなのかい？」

「そうみたいよ。私にも何がどうなっているからそうなのかなんて判らないけど、そういうものみたい・・・」

「僕もそうなりたいものだ」そう言って吉野は、柔らかく笑って見せた。

「自信持って良いわよ。私は、間違いなくあなたを愛しているから」私も彼の笑顔に答えるようにそう言って笑って見せた。

「めぐみ、また此処へ戻って来ないかい？どうせ、君の部屋は空いてるわけだし、また僕に彼女が出来ても、此処へ連れて来たりはしないから。それに、僕だけだと、その柵だっていつ枯らしてしまうか判らない・・・」

私は彼の前に戻って座り直す。「でも私、今の部屋で生活出来てるから・・・」

「良いじゃないか、あそこはそのままにして、気が向いた時だけ此処へ戻ってくれば良い」

「あなた一人で淋しくなったの？」

「まあ、それもあるけど、それだけじゃない。例えば、また僕に恋人が出来たとするだろう？その時に君の存在が在れば、相手の方が結婚を望んだりしないかも知れないじゃないか」吉野はそう言って、悪戯っぽく笑って見せた。

「ふう〜っ。姑息な手段ね。私の存在を防波堤として利用しようって言うのね。でも、高い波は防波堤なんてもろともせず押し寄せるわよ」

「それはそれで良いじゃないか。そんな時には、僕だって、真剣に再婚しようって思えるかも知れないんだから。その時にはちゃんと君に話して出て行って貰うさ」

「あなたねえ・・・。幾ら元夫婦だからって、正直すぎない？」

「そうかな？正直に言うんだったら、僕はめぐみと一緒に住みたい。それだけだよ。だけど君は、きっとそれを承知したりしないって思うから、色々理由を考えたんだよ」

「なるほど……。でも、一度出て行った所に戻るってなんだか格好悪いわ」

「君の美意識が許さない？だったら、別荘だと思えばいいじゃないか」

「週に一度も来られないわよ」

「構わないさ。別に掃除洗濯を君にして貰いたい訳じゃない。たまにこんな風に君と向かい合ってお茶を飲んだり、食事をしたり出来れば、心が落ち着くと思うだけだから」

「あなたの心の平穩のためか……。確かに私もこの家にいると、落ち着くわ。だって、二人で決めて、買った家ですもの。それに、それなりの歴史もある……」

「そうだろう？僕だって君が居ないって言う事には慣れてるんだ。だけど、君がもう戻って来ないって言う事は辛い……」

「なんだか変な関係ね」私はそう言って大きくため息をついた。

「そうだ、今からスーパーへ行って、君の物を買おうよ。シャンプーだとか、歯ブラシだとか。そういう物だけでも此処に在れば、何となく自分の家みたいになるだろう？」

「本当にあなた、彼女を連れて来ないのね。もし、彼女が突然やって来て、そんな物を見つけたら、本当に傷つけるわよ」

「大丈夫。それにその方が五十嵐君の為にも成るんじゃないかな？」

「どうして？」

「あのね、めぐみ、恋に年の差は関係ないんだよ。君はいつも年上だからだとか、梶君の存在のことを言って、彼を拒んでいるけど、彼にとってはそんなのどうでも良いことだと思うな。彼は、確かに不器用なところもある。だけど、君を思う気持ちは本物だと思うよ」

「どうしてそう思うのかしら？」

「それは……。それは僕も君を愛しているからだよ。今まで何度か五十嵐君が君を助けてくれたのも見てきてるし……。五十嵐君は、いつだって冷静を装っていたけど、君が死にそうだった時に、とても動揺していたのが僕にだって判った。それは、君を深く愛していたからだと思うんだ。だってそうだろう？彼には君を助ける力がある。それに、今までだってそういう場面に何度も出くわしているはずじゃないか。なのに、彼は心底狼狽えていたんだ。なのに、君が助かった後には、なんでもなかったように自分を押しえて帰ってしまう。僕にはいじらしくって仕方なかったよ」

「いじらしいか……」

「そうだよ。君は、あんなに五十嵐君を苦しめるべきじゃない。もちろん、これを僕が言うのはお門違いかも知れないけど……」吉野が少し照れたように笑って見せた。

私もそっと笑って見せる。「構わないわよ。あなたの言うとおりですもの。私ね、彼にプロポーズされたの……。でも、茶化して逃げちゃった。だってそうでしょう？彼は、ちゃんと子供を作って、父親になることで、自分の不幸な生い立ちをやり直したがっているのに、私にそれを手伝う事なんて出来ない……。だから……」

「判ってる……。君だって辛いと思う。君も五十嵐君のことを愛しているんだもんね」

「あなたって、本当に何でも判っているのね」

「ああ、君のことなら大抵のことはね。でも、自分のことは何も判らない……。だから、僕のことを良く知っている君と居ることが、僕に安らぎをもたらせてくれるんだ」

「欠けたもの同志が、欠けた部分を補い合うって言うこと？」

「悲しいけどね」吉野はそう言って笑った。そして続ける。「別に僕の提案に答えるのは、急がなくて良いよ。僕はずっと君と買ったこの家に住み続けているから。でも、来年も柵の花を見たかったら、少しだけ急いだ方が良くかも知れないけど」

「大丈夫よ。柊って強いよ。何の手入れもしないでもちゃんと花を咲かせてくれるわ。でも、来年の春先には、もう少し刈り込まないと、窓を占領してしまうかもね」

「そう言えば、春先に君はいつもゴミ袋に一杯刈り込んでたね。でも、今年は伸び放題だ」

「あなたもやってみると面白いわよ。植物を育てるのって、自分が神様になった気分なのよ。必要な物だけ残して、後を落としてしまうって、人の手による淘汰でしょう？」

「怖い話だ……。差詰め僕なんてすぐに刈り取られてしまう役立たずだね」

「私もよ。子供を産まない女なんて、生物学的には何の役にも立たない」

「だから、精神世界にのめり込んだんじゃないの？」

「そうかも知れないわね。それに、正巳に出会って、ちょっと母性本能が目覚めたりしたし……」

「そう、母親みたいな気分なんだ」

「そうよ。いつか私が産んで育てられなかった息子なの」

「だったら、なるべく早く離れた方が良くね。でないと、傷がどんどん広がっていくよ」

「ありがとう。もう手遅れでなければいいけど……」

その後、吉野の提案どうり、近所のスーパーに買い物に出て、夕食の材料を買いそろえ、久しぶりに自分のキッチンで料理をし、二人でそれを食べた。そして、夜遅くに吉野に車で送って貰い、自分だけのお城へ戻った。

柗の花・・・ 1

玄関を入れてすぐの棚に、柗を一本生けた。少しの間だけ、柗の香りが楽しめそうだ。

上海から戻って、私はすぐに仕事を始めた。正巳は、次の日には、また九州へ出張に出た。その週末、元夫の吉野に誘われて、かつて住んでいた吉野の家に行き、昔自分が植えた柗に花が咲いていたので、一枝貰って帰ったのだ。

秋もだんだん深まって行く。もうすぐ、枯れ葉が道路に落ち始めるだろう。去年、私はその枯れ葉を踏みしめながら歩いていた時に、突然春樹に抱きすくめられたのだ。

それが全ての始まりだった。

「春樹・・・。あれから一年経つのね」一仕事終えて、お茶を飲みながら春樹に話しかける。

「ああ」春樹がいつものように私の中で答えた。

「あなたにとっては長かった？」

「いいや、アツという間だったよ。姉さんは？」

「私？私にとっては・・・。良く判らないわ。長かったような短かったような・・・。だって、何千年分の記憶を蘇らせたのよ」

「そうだな」

「でも、素敵な一年だった。吉野がね、またあの家に戻らないかって言うのよ。あそこに戻ったら私、この一年を無かったことに出来るかしら？」

「忘れてしまいたいのか？」

「それも分からない・・・。でも、これ以上正巳を傷つけるべきじゃないって吉野に言われたの」

「姉さんもそう思うのか？」

「ええ、それはそうだと思う。これ以上正巳に甘え続けているのは良くないわ」

「姉さんがアイツに甘えているのか？」

「そうでしょう？」

「俺はそうは思わないけどな。お互いに必要が在って、出会ったわけだから。それに、そんなに重く考える必要なんて無いさ」

「そりゃああなたにとってはなんでもないことでしょうか？だけど、普通の人はずうじゃないのよ」私はちょっとムツとして言う。

「そんなものか？だけど、姉さんが逃げれば逃げるほど、アイツは追いかけて来るぞ。ほら、もうすぐ電話が入る」春樹がそう告げた途端、また携帯が鳴った。

私はため息をついてからその携帯に出る。

「もしもし」

「めぐみさん！今から行っても良いですか？」

「あなた、出張じゃなかったの？」

「さっき戻ったところです」

「だったら疲れているでしょう？お家でゆっくり休めば？」

「何か都合の悪いことでも在るんですか？」

「いいえ、何もないわよ。だけど、あなた上海から戻って、そのまま出張に行っちゃったから、

疲れてるだろうなって思ったの」

「会いたいです」正巳はそう言いきる。

「判った。じゃあご飯を用意しておくわ」

「有り難う御座います。後三十分で行きますから」正巳はそう言って元気良く電話を切った。私はまたため息をつく。

「姉さん、自分の気持ちを大切にしてくれ。欲しい物を全部手に入れても、何も悪い事なんて無いんだ」春樹が言った。

「良く判らないわ」私はそう言って夕食の用意を始めた。

「ねえ、正巳。私吉野の家に戻らないかって誘われたんだけど・・・」

私は彼のグラスにワインを注ぎながら言う。

正巳は、優しげに笑って見せてから言う。

「めぐみさんがそうしたいのなら、それが一番良いんじゃないですか？」

「そうね。でも、私にも良く判らないのよ。もちろん、この場所を引き払うつもりなんて無いし、吉野の家に戻るって言っても、別荘みたいな感じになるとは思うんだけど・・・」

「僕は構わないですよ。めぐみさんが何処にしようと、電話してからご飯を食べに行きますから」

「何？私ってあなたの飯炊きババァなの？」

「違いますよ。めぐみさんは僕の愛人です」正巳がそう言って笑って見せた。

私はため息をついて言う。「あなた、本当に似てきたわねえ」

正巳はそれに答えずに、また黙って笑って見せる。

私は一度目を閉じて、気持ちを切り替えてから言う。「それで、今日は何の用なの？」

正巳が料理に箸を延ばしながら言う。「ウォンさんが来週来られます。それで、ちゃんと仕事の話をつけるつもりです」

「そう。上手く行くと良いわね」私が相槌を打つ。

「僕、色々考えてみました」正巳が箸を置き、グラスに残ったワインを飲み干して言った。

私はそのグラスにワインを注いで彼の顔を見る。

「僕、めぐみさんに随分甘えてばかりだったなあって反省したんです」

私は自分のグラスを手の中で揺らす。

「それ・・・、春樹に何か言われたの？」

「どうしてですか？」

「私が春樹に言ったのと同じ事をあなたが言ったから・・・」

「やっぱり僕、めぐみさんの負担になっていたんですね」

「違うわよ。私があなたに甘えすぎていたのがいけないんだって春樹に言ったの」

「めぐみさんが僕にですか？」

「ええ、そう。あなたの望みを叶えられないのにも関わらず、あなたの傍を離れなかった私がいけないの・・・。吉野にも言われたのよ。『君は、それ以上五十嵐君を傷つけるべきじゃない』って」

「それは違います。僕がめぐみさんに無理なことばかり御願ひしていたんです。めぐみさんの気持ちなんて考える余裕もなく、僕は初めての恋に夢中になっていた。本当に申し訳在りませんでした」正巳はそう言ってペコリと頭を下げた。

「それで愛人なわけ？」

正巳がにっこりと微笑んで言う。「そう。やっぱりめぐみさんを失うのは嫌ですからね。独占できなくても、それなりに愛していたい。そうするには愛人として別の枠に置いておくのが一番良いかなって・・・」

「春樹のやり方を真似るわけね」

「やっぱり梶さんは愛することの達人でした。だけど、僕は梶さんみたいに沢山の人は愛せない。今だってめぐみさん一人で心の中が一杯ですから。だから、もう一人好きな人が出来た時にはどうなるか判らないですけど・・・」

「それで良いのよ。なるべく愛する人を悲しませないようにしなさい」私は偉そうに言う。

「そうですね。でも僕は、めぐみさん以上に好きな人が出来て、それをめぐみさんに告げた時には、悲しんで貰いたい」

「その時にはまた、胸で泣かせてくれる？」

「それは、僕の仕事ですから、任せて下さい」正巳がそう言って笑った。

「バーカ！自分を悲しませた張本人の胸で泣いたりするものですか！」私も笑う。

「めぐみさんは、そんな事で悲しんだりしないですよ」正巳はそう言ってまたグラスを空けた。

「あなた、見損なわないでよ。私はあなたが思っているより、ずっと情熱的で、嫉妬深い女なの。だから、今まで春樹と対等に渡り合えてきたのよ」私はそう言って片目をつぶって見せた。

そんな話をしながら食事を終え、私は片づけをする。正巳は、そっと後ろに忍び寄って洗い物をしている私を後ろから抱きしめた。

「ほら、食器を割っちゃうからあっちへ行ってて」私はそんな彼に言う。そして、同じ様なことがあったのを思い出した。そう、あれは、前のオフィスでのこと。春樹がコーヒーを入れている私を後ろから抱きしめたのだ・・・。

「僕の名前、知ってますか？」正巳が耳元で言う。

「知ってるわよ。五十嵐正巳君」私が答える。

「だったら良いんですけど・・・」そう言って強く抱きしめた。

「内緒事が出来ないなんて、不便よね」私はそう言って濡れた手で彼の頬に触れ、続ける。「びしょびしょになりたくなかったら、そのウイスキーを持って行って、向こうで飲んで下さい」

「はい」正巳は元気良く返事をして、グラスとボトルを持ってキッチンを出た。

私も洗い物をすませて、自分のグラスと氷を持ってキッチンを出る。

正巳は、カウチソファーに腰を下ろして、窓を見ていた。

「めぐみさん。お月様が綺麗ですよ」

私はグラスと氷をテーブルに置いて、窓のそばへ行く。「本当ね。中秋の名月はとっくに過ぎちゃったけど、今夜の月もなかなかの名月」

「明かりを消しましょう」正巳がそう言って壁にあるスイッチを切った。

部屋の中が暗くなることによって、月の明かりが冴えた。

「僕、本当は、梶さんにも吉野さんにもめぐみさんを返したくない。僕だけのものにしておきたいんです。でも、それは無理ですよ」正巳が私の後ろに廻って頭の上で言った。

「私・・・私にも良く判らないのよ。だから、吉野の家に帰る件も、まだ返事をしていないの。でも、彼の元へ戻れば、春樹と再会してからの一年を無かった事にしてしまえそうな気がするのよ」

「辛い一年だったんですね」

「そう、楽しくて辛い一年……。あなたとは、もう一度真っ新たな心で出会い直してやり直せると良いわね。だって、私、汚れすぎているわ」

「どう汚れてるって言うんですか？」

「だってそうでしょう？私は夫が居ながら違う男性と恋に落ちて、離婚したのよ。そして、その愛人も夫もどっちも失ったの」

「僕は、梶さんと男同士でありながら愛人関係にあったんですよ。それって充分汚れていませんか？」

「あなたはまだまだやり直せる。ちゃんと女性だって愛せるようになったし。いいえ、愛する相手が男性でも別に構わないの。ただ、誰も傷つけないでね」

「めぐみさんだって誰も傷つけていないじゃないですか」

「私は、吉野も傷つけたし、あなたにだってこんなに辛い思いをさせている」

「僕は、楽しんでますよ。梶さんが居なければ、こんなに愛おしい人を抱きしめる事なんて出来なかったし、吉野さんがめぐみさんを手放してくれなければ、プロポーズすることも出来なかった。吉野さんが傷ついたかどうかは僕には判りませんが、少なくとも吉野さんがしっかりとめぐみさんを捕まえて居さえすれば、別れることになんて成っていないはずですよ。つまり、めぐみさんが取らなければならない責任なんて何もないって言う事です」

「随分、勝手な言い分みたい……」

「めぐみさんって、他人のことはとっても良く判るのに、自分のことは全く判らないんですね」正巳が頭の上で笑う。

「先週、吉野もそう言ってたわ……」

「もう暫く僕に全部任せて下さい。僕、めぐみさんを幸せにするということに挑戦しているんです。それが出来ても出来なくても、挑戦することに意義が在るんです。だから、まだ僕の傍から居なくならないで。もう少し僕を助けて下さい」

「あなた……」私は振り向いて、彼の胸に顔を埋めた。

正巳が頭の上で言う。「丸い月だって充分に美しい。めぐみさんは欠けたものばかり見過ぎてきたんですよ。確かに丸くなくても美しいけど、丸くたってこんなに綺麗なんだ。それに月は元々丸いんです。ただ光の当り具合で欠けて見えるだけなんですよ。ちゃんと学校で習ったでしょう？僕は、めぐみさんのこと何処かが欠けてるなんて思っていませんよ。回りの人全部何処も欠けてなんてない。まあ、梶さんは肉体を持っていないからその部分は欠けてしまったのかも知れないけど、僕達が梶さんの居る世界へ行けば、やっぱり丸いんだと思います。もう、自分の片割れを探すのはやめましょうよ。僕達は丸いままで愛し合える」

「そう……。あなた、本当に良く理解したのね」私は正巳の顔を見上げて言った。

正巳は照れ笑いを浮かべて、もう一度抱きしめた。

柊の花・・・ 2

「めぐみ、元気そうだね」アンディがそう言って立ち上がり、手を差し出した。

「あなたこそ」私もそう言って彼の差し出された手を握る。

座ったままの正巳が笑って見ていた。

正巳が先日言ったように、ウォンシャオロンが日本へやって来た。

私は自分の仕事が長引いたので、少し遅れて約束の店に着いたのだった。

正巳は、春樹がいつもそうだったように、ホテルの中の日本料理屋の個室を取っていた。

そして其処は、春樹と再会した日に食事をしたお店。あの時と同じように飾り棚には竜胆の花が一輪飾られている。

「ほら、二人とも座って下さいよ」正巳が笑いながら言う。

「めぐみは、僕に会いたくないから来ないのかと思った」アンディが座りながら言う。

「どうして？」私は意味を知っているのにわざと尋ねる。

アンディはそれに微笑みで返した。

「ごめんなさい。ちょっと仕事で手間取ったものだから・・・」私は腰を下ろして続けた。

「あなたに殺してもらいたくて来たのよ」

「そう。本当に殺されたかったんだ」アンディが微笑みを崩さずに言った。

私はそれに頷いてみせる。

「さあ、乾杯しましょう」正巳が私のグラスにビールを注いで言った。

「再会を祝して！」正巳がそう言って、各々のグラスを軽くぶつけ合った。

私はそのビールを半分ぐらい飲んでグラスを置く。そしてアンディに言う。

「ねえ、私、なんにも知らないでこれ貰っちゃったけど、良かったのかしら？」そう言って首から下げた勾玉を襟元から引っ張り出す。

「良いんだよ。それは僕よりもめぐみの方が合ってる。そうそう、そうしていつも身につけておくのが良い」

「良かった。高価なものみたいだけど、宝石箱の中に置いておくのはつまらないと思って、紐を通したのよ。それで首にかけてみたら、なんだか暖かい感じがするの」

「それは梶が僕にくれたものだったんだ。だから梶の形見として大事にしてやってくれ」

「もしかして、私がこの指輪のことを言ったから・・・」上海で正巳から譲り受けた指輪が唯一の形見だから大切なものだと言ったのだった。

「それも。でも、それだけじゃない。その石はこの国で採れたものだから、やはり日本人が持つべき石なんだ。それに普通の人を持ったのではその石は力を発揮しない。だから梶は僕にくれたんだと思うけど・・・」

「結婚祝いだったんですってね・・・」私が言う。

「梶に聞いたのか・・・」

「ええ」私が肯く。

「まあ、その石を手放して、僕は幸せに成るつもりだ」

「どう言うこと？」

「つまり、その石がある限り李翠玉が忘れられないって言う事さ」そう言って片目をつぶって見せた。

正巳が注文してあった料理が運ばれてきた。しかし、誰もそれに手をつけようとはせず、話し

続ける。

「忘れられないのは李翠玉じゃなくって梶春樹でしょう？もしかして春樹って、あなたが結婚してしまうのが悔しかったのかな？」私も笑って言う。

「だったら嬉しいけど」アンディが言った。

「めぐみさん。ウォンさんと梶さんの関係を知ってるんですか・・・」正巳が心細そうに言った。

私は笑って答える。「なんにも知らないわよ。だって、死んだ男の男性関係や女性関係に振り回されるのはもうごめんですもの」

「ちゃんとお見通して言う事ですね」正巳がため息混じりに言った。

「正巳君。そんな言い方をするとばれちゃうでしょう？まあ、あなたと春樹とのこともあるし、それはそれで良いんじゃないの？どうせ、アンディと春樹の関係があったから、あなたともそうなったんでしょ？」

「姉さんには敵わない」春樹が突然正巳の口を使って言った。

「女のカンよ。だいたい、あなたの考えそうなことなら、あなた達みたいな不思議な力がなくっても判るわよ。あなたがアンディに自分の名前と同じ石を結婚祝いに贈ったって言った時になるほどって思ったのよ。この焼き餅妬き！」

「まあ、姉さん程じゃないけどな」春樹も笑いながら言う。

「お前のせいで僕の結婚生活がダメになったのか・・・」アンディが笑いながら春樹に言った。

「まさか？お前の愛が足らなかったんだらう？」春樹が言う。

「よく言うよ。お前みたいにあっちこっちで愛を振りまいていたら、命が幾つ在っても足りないからな」

「だから、俺は早く死んだんだよ」春樹が笑う。

「・・・」アンディは返す言葉を見つけられない。

それを見て私がアンディに言う。

「言いたいことがあったら全部言っちゃった方が良いわよ。私は別に何も気にしないから」

「今更梶に何を言っても仕方ないだらう？だって梶はもう死んだんだから」

「まあな。それにシャオロンが何を言いたいのかぐらいは、俺だって判ってるつもりだ」

「お前に何が判るって言うんだ？」アンディがグラスに残ったビールを一気に飲み干して言った。正巳がそのグラスにビールを注ぐ。

「何故タイロンの言うように運命を変えようとしなかったのかって言いたいんだらう？」正巳の口を使って春樹が言った。

「そう・・・、死なないで良い方法もあったんだ」私が言う。

「そうさ。梶はその方法を知っていながら実行しなかった・・・。だから、梶は自殺したのと同じさ」そう言ってアンディは、注がれたばかりのビールをまた一気に煽った。

「俺だって迷ったさ。前にも言ったように俺は生きていたかった。しかし、その代償は自分を捨てることだったんだ。全ての記憶を消し去って、やり直すと言うことだった。俺には、愛した記憶を消す事なんて考えられなかったんだ。それは俺にとって掛け替えのないものであったし、俺自身の存在価値でもあったからな。前に五十嵐に言った、全ての記憶を消して生まれ変わると言うのが、タイロンの言った方法だ。それをしてしまえば、姉さんのことも、五十嵐のことも、妻や子供達のことも、もちろんシャオロンのことだって全てリセットされてしまう。確かにそれでカルマの解消には成るかも知れない。しかし、その生でのそれがリセットされるだけで、生まれ変わるときにはまた同じ事を繰り返したくなるに決まってる。俺は、もうこれ以上姉さんを傷つ

けなくなかったんだ。この生で全てをやり遂げてしまいたかったから・・・」

「あなたが死んだことで私は充分過ぎるほど傷ついたけど・・・」私が言う。

「そうだな。俺は生きていても死んでも、結局姉さんに辛い思いをさせてしまう。シャオロン、聞いてくれ。俺は、いや、翠玉は、確かに皇帝だった姉さんに酷い殺され方をした。しかし、そこまで皇帝だった姉さんを追い込んだのは翠玉だったんだ。そして、その事で姉さんは深く傷ついた。俺は、あの中国での記憶がカルマの一番最初だと思っていた。しかし、その前もあったんだ。ずっと魂は繋がっている。それらの生は今の状態になるための準備だった。そして、今の形も、未来への過程でしかない」

「梶は、何故それ程までめぐみを愛しているんだ？」アンディが微笑みを浮かべて言った。

「知っているんだろう？お前だって・・・」春樹がアンディに微笑み返す。

「はい。でも、お前の口からそれを聞きたい」

「判ったよシャオロン。俺は、そして俺達は、同じものなんだ。だから、俺が愛しているのは姉さんだけじゃない。俺にとっての全ての人と言うのを姉さんという存在が代表して現しているんだよ。もちろんそのすべての人と言うのには自分自身をも含んでいる」

「それがお前の愛の形か」

「そう。姉さんは俺の愛の入り口であり、全てなんだ。判るか？」

「はい。僕にだって判って居るさ。僕にとってそれがお前、梶の存在だったんだからな」

私は、ただ黙って二人の話を心に沈める。そして、心の中で龍に語りかける。

『全てが同じものの一部分って言う話を彼らはしているのね』

『そうだ。君の作り出した幻は、とても素晴らしい幻だったね』龍が答えた。

「今の意志は誰のものなの？」アンディが尋ねる。

「姉さん、器用だなあ」正巳の口を使った春樹が言った。

「ウォンさん、めぐみさんの後ろを見て下さい」自分自身の意志で正巳が言う。

アンディが少し離れて私の方を見つめる。そして、驚いたような顔をした。

「龍が出てきたの？」私が言う。

アンディがためらいながら肯く。

正巳が微笑みを浮かべながら言った。「めぐみさんが龍に話しかけると、姿を見せるんですよ」

「俺が姉さんのエネルギーを使っているにも関わらず、姉さんはまだ龍まで飼ってるんだ」春樹がそう言って笑った。

「飼ってるわけじゃないけど・・・」私はそう言って運ばれてきた料理に箸を付けた。

「僕達も食べましょう」正巳がそう言って、自分も箸を取る。

アンディが首を一振りして自分のグラスにビールを注ぐ。「僕はもう少し酔った方が良いみたいだ」

正巳は、新しい料理を運んできた仲居さんに、日本酒を頼む。

「ねえ正巳。あなたにはさっきの話理解出来た？」私は料理を食べながら尋ねる。

「難しいですね。僕が今学んでいる『愛』とは次元の違う話ですね」正巳も食べながら答えた。

「そうね。でも結局同じ事なんだと思うわよ。たった一人を愛することは、全ての人を愛しているのと同じ事だって言ってたんだもの」

「梶さんは、沢山の人を愛しましたけどね」正巳はそう言って笑う。

「だからこそ、めぐみという特別な存在を必要としたんだろう？」アンディがやっと料理に箸を付けて言った。

「特別か・・・」私は箸を置いてグラスを空ける。

「めぐみさんはその言葉嫌いですよ」正巳が笑う。

「ええ。でも、確かに私にとって春樹は特別な存在だったわ。あんな博愛主義者を愛してしまったんですもの、少しぐらい特別でも構わないんじゃないかなあ」

「博愛主義者か・・・。なかなか良い呼び方だな」春樹が今度は私の口を使って言った。

「だって、女ったらしって言うだけじゃ片手落ちでしょう？現にあなたの愛した男性が此処に二人も居るんですもの。それに、あなたが沢山の女性を愛したのだってちゃんと知っているし・・・」

正巳が私のグラスにビールを注ぐのを止めて言う。「私もお酒を貰うわ。今日はちょっと酔っぱらってくだを巻きたい気分よ」

「どうぞどうぞ。後で此処の部屋を取っておきますから」正巳がそう言って運ばれてきたばかりのお酒を注いだ。

「正巳、今日はどうしてこのお店にしたの？」

「何となくですよ。どうしてですか？」正巳が言った。

「じゃあ、春樹ね・・・」

「そうだったんですか。この店で始まったんですね」正巳が私の心の中を読んで言った。

「ここで終わればお話としては素敵だけど・・・」私はため息を付く。

「まだまだ続きはあります。新しいメンバーも増えて、沢山楽しいことが在るんですよ」

「新しいメンバーって僕のこと？」アンディが尋ねる。

「もちろんですよ」正巳はとても素敵に笑って見せた。

私達は、食事を終えて店を出た。

勘定を終えた正巳が言う。「もう少し飲みますか？それとも部屋を取りましょうか？」

「どちらも結構よ。私一人で帰るから。タクシーに乗れば平気よ」

「ダメですよ。酔っぱらった女性を一人で帰らせるなんて僕の良心が許しません。僕が送ります」正巳が言った。

「大丈夫よ。アンディは何処に泊まって居るの？」

「僕はこのホテルだよ。そうだ僕の部屋で少し休めば良い。どうせ五十嵐君の会社で取った部屋だ」

「そうですね。いつものスイートだから心配いらないですよ」

「一人でタクシーで帰った方が、ずっと安全みたいな気がするんだけど・・・」

「大丈夫ですって、別に二人してめぐみさんを襲ったりしないですから」正巳はそう言って笑った。

「あなた達のお楽しみの邪魔をしたくないだけよ」私が冗談で言う。

「めぐみさん！僕達そんな関係じゃないですよ」正巳が抗議の意志をこめて言った。

私は首を竦めて言う。「また怒る・・・」

「じゃあ、僕の部屋へ行こう」アンディがそう言って歩き始めた。

正巳は私の腕を支えて歩く。

「大丈夫よ。あの時みたいに酔っぱらっていないから」私が言う。

「あの時って？」正巳が言う。

「いいえ、なんでもないわ」春樹と御堂筋で再会した後、私はこのお店で酔っぱらい、春樹の取った部屋で、初めて彼の特殊な記憶のことを聞かされたのだった。

過去生での関係・・・。

「めぐみさん。それをそのまま受け入れましょう。もう、此処まで来てしまったんだから。さっき梶さんが言ったみたいに、リセットしてやり直すつもりなら別ですけど・・・」

「リセットか・・・」私は俯いたままそう呟いた。

有り難いことに、アンディの泊まっている部屋は、一年前春樹の取った部屋ではなかった。

「あれは俺個人の取った部屋だからな」正巳の口を使って、春樹が私に言った。

「ちゃんと仕事と個人は分けていたのね」私が言う。

「まあな。それに、一番最初からスイートを取ったんじゃないか」

「まったくあなたって言う人は・・・」

「梶、どうしてなんだ？」一人掛けのソファに腰掛けたアンディが、興味深そうに尋ねた。

私も隣のソファに腰を下ろす。

「梶さん、めぐみさんに答えて貰って下さいね。僕は飲み物の用意をしますから」正巳がそう言って冷蔵庫を開けて、グラスと飲み物を揃える。

「女の気を引くのに意外性というのは大切なんだよ。最初からハイレベルで行くと、意外なことが少なくなってしまうだろう？だから、最初のレベルを少し下げおくと、後で気持ちを引きつけやすいんだ。でも、姉さんの場合は、そんな事何も考えてなかった。あの翌日、此処でセッションの仕事があったから、この部屋は使いたくなかっただけさ」春樹が私の口を使って言った。

「そうか、それであんなところを歩いていたのね」私が言う。

「ああ、セッション前の部屋の浄化を終えて、何となく散歩がしたくなったんだ。そうしたら姉さんが前から歩いてきた。俺になんか全然気づいていなかったから、俺は驚かせようと思ってそのまま抱きしめたんだ」

「その時めぐみはどうしたの？」アンディが尋ねる。

「そりゃあ驚いたわよ。声も出ないし、ただこの人の腕の中で固まってたわ。でも、一発ぐらい殴っておけば良かったって思う。今度そんな事があつたら、咄嗟に殴る心づもりはしているのよ」そう言って笑う。

「めぐみさん、薄い水割りにしておきましたよ」正巳がそう言って私の前にグラスを置く。

「ウォンさんはロックで良いですね」そう言ってアンディの前にもグラスを置いた。

「ありがとう」アンディが優しげな笑顔で正巳を見上げる。正巳もそれにとっても素敵な笑顔で応えた。

正巳も自分のグラスを持って私の隣に腰を下ろす。

「そうですか、此処でセッションをやった頃の話だったんですね。だったら、後半月ぐらい後ですよ」正巳が言う。

「ええ、そうね。御堂筋が枯れ葉で埋っていたもの。あの時の靴の下で銀杏がキュッキュッって鳴ってた音を今でも思い出せるわ」

「その時めぐみは結婚していたんだらう？」アンディが尋ねる。

「ええ、そうよ。だから春樹を受け入れるまで、とっても悩んだわ」

「そう、姉さんも、俺だって随分悩んだ・・・」今度は正巳の口を使って春樹が言った。

「そうよね。あなたはまるまる一月何も言って来なかった。私はあの時点であなたとの再会は夢だったことにするつもりだったのよ。なのにあなたは、真っ赤なバラの花束を抱えてやって来た・・・」

「それもテクニクかい？」アンディが尋ねる。

「まあな。それだけ恥ずかしいことをしておくとお後が楽なんだ。それにあの時は、姉さんに花を贈る必要があるって思ったんだ。なんとなくだけどな。ところでシャオロン、これからガールハントの勉強か？随分真剣に尋ねてるが・・・」

「ああ、僕だって幸せにならないとな・・・」

「奥様が、運命の人と出会ったって言ってたわね」私が酔いに任せて思いきって言った。

「はい。彼女の前世からの恋人だった・・・」

「奥様・・・、えっと元奥様はそれで幸せそう？」私は調子に乗って尋ねる。

「さあ？どうだろう？どうして？」アンディが尋ね返す。

「私と同じ立場だから・・・、気になったのよ。私は春樹に死なれ、夫にも逃げられちゃった。でも、全然後悔なんてして無くって、これでも幸せに生きてるつもりなのよ」そう言って笑って見せる。

「そうか・・・。彼女も幸せだったら良いなあ」

「あなたは、ちゃんと奥様のこと愛していたんでしょう？」

「そのつもりだけど。今と成れば良く判らない」

「あなたはさっき、春樹にとっての私が、あなたにとっては春樹だったって言ってたわね。それって奥様にとってはかなり辛い話よ。もちろんちゃんとあなた達が言いたかった意味は判っているわよ。だけど、魂のレベルで現象を判断すると辛いことが沢山在るみたい。特に男と女の間では・・・」

「そうだね。それで僕達は傷つけ合って別れたのかも知れない」

「元夫がね、言ったの。僕は君に傷つけられたわけじゃない。僕自身で自分を傷つけたんだって。私もそう思うの・・・。私は誰にも傷つけられはしない。自分が望んで傷ついただけなんだってね」

「僕が、いや、僕達はお互いに傷つくことを望んでいたって言うことだね」

「多分・・・。でも、アンディはこれから恋をして、新しい幸せを見つけようとしているんですもの、立派よ」

「めぐみさんだって、幸せになるべきですよ」正巳が言う。

「あなたが幸せにしてくれるのよね」私はまた正巳をからかう。

「姉さんはいつでも何処にいても幸せなんだよ」春樹が私の口を使って正巳に言う。

「梶さん、主観的な幸せはそれで良いのかも知れないけど、僕はめぐみさんを客観的にも幸せにしたいんです」意地になった正巳が言う。

「客観的に幸せでも、主観的には不幸だって言う事も沢山あるけど・・・」アンディが言った。

「まあ、みんなやりたいことをやってみるのが良いんじゃないかしら？結果は後から付いてくるものだし、途中が楽しめれば、結果なんてどうでも良い事って沢山あるもの」私が言った。

「そうだ、さっきの龍の話をしてくれないか？」アンディが言う。

「ああ、あれ・・・。私の親友よ。いつでも私の中にいて、私の話し相手になってくれるの。とても客観的に色んな事を見ていて、それを説明してくれる存在よ」

「今の梶と同じ様な存在かい？」

「ちょっと違う。春樹は人の男としての感情を残したまま私を肯定してくれるけど、龍は違う。もっと・・・そう・・・根元的な感じって言えばいいのかしら？でも、やっぱり春樹と良く似た存在かも・・・。だって、『僕だって春樹君と同じように君を愛しているからね』なんて言ったこともあるし・・・。龍を見失うと、誰かに自分の存在を写して確認しなきゃなんて思って焦ったりもする」

「そんな風になったことある？」

「もちろんよ。今でも良くそうなるわ。だってそうでしょう？私は目に見えて、手に触れられる大切な者を、二人も失ったの……。春樹と夫。なのに、そのどちらもが魂のレベルでは繋がっていて、本当に無くなってしまったわけじゃないのも判る。結局中途半端なのよ。どっちつかずって言う感じ……」

「めぐみは、そんな時、どうするの？」

「バタバタと足掻き倒して、時の過ぎるのを待つ。必要な時間が過ぎて、次ぎに進む準備が整えば、また龍が戻ってくるのよ」

「いつも龍と繋がったままじゃないのかい？」

「繋がっているわよ。だけど、自分で考えないといけないときには、龍に尋ねたりしないだけ。だってどうせ『そのままが良いんだよ』としか言わないもの」

「なるほど。特殊なものじゃないって言う事なんだね」アンディが肯く。

「そう言うこと。さっきは、あなたと春樹がとても素敵な話をしていたから、思わず龍に話しかけたのよ」

「それで、あの思考がやってきたって言う事？」

「そう。私には見えないから判らないけど、私が龍と話すときに、あなた達には龍の姿が見えるらしいわね」

「そうだね。僕は初めてだったからびっくりしたよ」

「僕だって初めてめぐみさんを訪ねた時にびっくりしたんですよ。めぐみさんの部屋の中に龍がゆらゆらと泳いでいたんですから。その上、その龍はにこにこ笑ってた」正巳が言う。

「それは驚くだろうね。めぐみが書いているって言う物語と関係が在るんだろう？」アンディが言う。

「多分ね。龍に教えて貰いながら書いているから、イメージが定着してしまったのかも知れないわね」

「イメージの定着か……。僕が昔使ってた式と同じ様なものなのかも知れないですね。式を作るのも結局そうなんですよ。幾ら術を習っても、それをどう必要とするか、どんな風に使いたいかの意識がはっきり持てないと、物質化はしない」正巳が言う。

「そう言うものなんだ……。正巳は、生まれつきそれが出来たのね」

「ええそうです。それだけ人に飢えていたから出来たんだとは思いますが……」

「もう式は使わないのかい？」アンディが尋ねる。

「ええ、暖かな人間の幻を此処に作り出せましたから」正巳はそう言って私の頭を掴んだ。

「また、それをする。でも、あなた、本当に色々な事が判ってきたわね。初めて会ったときには、『この子本当に大丈夫なのかなあ』って思ったのよ。春樹は私に一番面白いことを残して置いたんだなんて言ったけど、私には一番大変なことが残ってるって思えた」

「何が大変だって思えたの？」アンディが尋ねる。

「正巳は人を愛すること。それを学ばないといけないって春樹が言ったの。その為に私が必要なんだって」

「めぐみだけ？」アンディが言う。

「ああ、姉さんが居れば、五十嵐はきっと沢山の愛の形を学べると思った。俺としたら、こんなに姉さんのことを愛するようになるとは思ってなかったがな」春樹が私の口を使って言った。

「梶さん。梶さんがあれだけめぐみさんを愛していたから、僕はそれに負けないように愛しているんですよ。でも、梶さんと同じようには愛せません。僕には僕の愛し方がありますから」

「それはそうだろう。僕と梶との愛、五十嵐君と梶との愛、梶とめぐみの間だの愛、みんな違う形をしている。だからこそ人は愛することをやめないんじゃないか？」アンディが言った。

「そう言う事みたいね」私が言う。

「めぐみさん。それで旦那さんの元へ帰ることにしたんですか？」正巳が言う。

「いいえ、まだ何も決めていない。今のところこのままが一番楽だし、取り敢えずあなたに甘え続けていても良いって思うことにしたから」私はそう言って笑って見せる。

「めぐみが五十嵐君に甘えているのかい？」アンディが驚いたように言う。

「そうなんですよ。めぐみさんは僕を傷つけているって思っているんです。おかしいでしょう？全てのことを知っていながら、自分が幸せになる道だけは目をつぶって見ないようにしてるんですよ」正巳はそう言って笑って見せる。

「だって、どうしても私と正巳が幸せな夫婦をやってるなんて想像できないんですもの。それに、正巳だけにはどんなことをしても幸せになって貰いたいって思うの……。きっとこれも前世のカルマね」私もそう言って笑う。

「結局各々が、望むように生きていて、それがお互いの幸せに繋がるって言う形が理想なんだろうね」アンディが言う。

「そうね。そうしているのが一番良いわね。龍！どう思う？」私は初めて人前で、龍に声を使って語りかけた。

「初めて僕に喋らせてくれるんだ。めぐみ、今の話、真理だよ。それを心に沈めて、ゆっくり考えると良いね」アンディの口を使って龍が言った。

「アンディ！」私は驚いて彼の名を呼ぶ。

「姉さん、大丈夫だ。シャオロンの元々持っている力だよ」春樹が正巳の口を使って言った。

「めぐみさん、ウォンさんは僕が知ってる限りで、梶さんと同じぐらいの力を持ってる唯一の人だって言ったでしょう？」今度は正巳が正巳の意志で言う。

「そう、君達が梶を内に引き込んでいるのと同じ事だよ。チャネリングの一種だ」アンディがアンディ自身の言葉で言った。

「あ〜っ、またややこしく成っちゃうわけ？」私が声を上げる。

「めぐみ、大丈夫だよ。いつだって僕は君の中にいたろう？僕は此処に居る。君は其処にいる。そして僕達は同じところにいる。ほら、僕が僕だって君にも判ったかい？」龍の言葉だった。

「もちろん判るわ。でも、頭がぐちゃぐちゃになりそうよ。だって、春樹と正巳の声を違うところで聞き分けているのよ。それがもう一カ所増えちゃうって言う事でしょう？もう頭がパンクしちゃう」

「だったら、恐怖の回路を封鎖してしまえばいい。これからの君にそれは必要ないからね。君がいつもかかずにわっている恐怖だとか不安に使っているエネルギーから比べれば、もう一つ違う場所で僕の声聞くぐらいたいしたこと無いよ」龍の意志だった。

「ありがたい言葉だわね。だけど、人はそれを持っているから此処まで生き延びてこられたのよ」

「君は生き延びることを望んでなんていないじゃないか」これはアンディの意志だ。

「君は、僕に殺されることをあんなに強く望んでいたんだからね」アンディが続けた。

「そうね。でも、色々有るのよ」私は投げやりになってきた。

「ほら、メンバーが揃ったぜ。姉さん、今度は何を始めるつもりだ？」春樹が私の口を使って言った。

「何も始めたりしないわよ！私は穏やかな日常生活を楽しむの！」私は半泣き状態で言った。

「めぐみさん、ほら、落ち着いて。これでも飲んで下さい」正巳はそう言って、私のグラスにお酒を注いだ。

私は、自棄になってそれを一気に煽る。おなかの中を熱い液体がぐるぐる回った。そして、暫くすると目が回り始めた。

「正巳、ちょっと濃かったんじゃないの？」

「ええ、サービスしておきました」そう言って私の肩に腕を回して、抱き寄せた。

私は、その腕を振りほどいて、自分の力で体制を立て直す。しかし、酔いの回った私の身体は、何故か傾いて行く。私はソファの肘掛けに寄りかかって自分を支えながら言う。

「それでアンディはこれからどうするの？メモリーの仕事を手伝ってくれるの？」

「はい。面白そうだって思っているよ。取り敢えず、一週間正巳君と一緒に行動してみるつもり」アンディが答えた。

「丁度次のカウンセリングのマッチングと、前にマッチングしてあったカウンセリングがあるから、それを見て貰おうと思っています。セミナーに関しては、良く判っている社員を香港の方へ派遣することにしています」

「じゃあ、なんとか成りそうなものね。良かったわ・・・」私はそのまま目を閉じて眠り込んだ。

「唐突な酔い方だね」アンディが言う。

「本当ですね。まるで電源を切ったみたいだ。きっと昨夜徹夜だったんですよ。めぐみさんの仕事は、納期に合わせるのに、無理しますからね」正巳がそう言って微笑む。

「ベッドに運んで上げると良いよ」

正巳が背いて、眠り込んだ私を抱き上げた。その感触は、春樹に抱き上げられて出雲で春樹と兄弟だった時の生を思い出した時と同じだった。

全てが何処かで繋がっている。私は肉体を持たない男の腕に抱き上げられ、安心して眠った。

目覚めた時、隣のベッドではアンディが眠っていた。そっと起きあがって、扉の開け放たれたベッドルームを出ると、ソファの上に正巳が寝ていた。正巳は、私の気配を感じてすぐに起きあがり、言った。

「おはよう御座います。良く眠れましたか？」

「ええ。ごめんなさい。私眠っちゃったのね・・・」

「構わないですよ。お陰で僕は酔っぱらい運転で送って行かなくて済んだんだから」

「私、帰るわ」

「今何時ですか？」正巳が尋ねる。

私は腕時計を見て言う。「六時半よ」

「じゃあ僕が車で送ります」

「構わないわよ。あなた今日も仕事でしょう？もう酔っぱらってないし、電車も動いているから一人で帰れるわ」

「いいえ、どうせ僕も帰って着替えたいし、送っていきますよ」

「じゃあ御願いしようかしら」私はそう言ってテーブルの上のグラスを片づける。

正巳はベッドルームへ行ってアンディにその日の予定を知らせて、帰ることを告げた。

私もベッドルームを覗いて「ごめんなさいね」と言って謝った。

アンディはベッドの上に起きあがって、「昨夜は楽しかったよ」と言ってウインクして見せた。

私は正巳の車で自宅まで送って貰った。

「昨日は本当に御免なさいね。今度からあんまり飲ませないでね」

「いいえ、また沢山飲んで貰いますよ。なかなか酔っぱらっためぐみさん、可愛かったです」正巳がそう言って笑って見せた。

「また何かあったら電話して。昨日納品しちゃったから、暫くは暇だと思うから」

「判りました。多分、またすぐに出番が在ると思いますよ」

「どうして？」

「だって、役者が揃って、物語が始まらないはずがないでしょう？」

私は俯いて首を振る。そして言う。「もう命に関わるような問題は懲り懲りよ」

「大丈夫ですって。僕が必ず守って見せますから」正巳はそう言って笑って見せた。

私は、それに微笑んで返して、車を降りた。そして、走り去る正巳の車を見送った。

柊の花・・・ 3

正巳に送ってもらい、帰り着いてすぐにシャワーを浴び、くつろいだ服に着替えた。いつものソファに腰掛け、お気に入りの紅茶を飲みながら春樹に言う。

「ねえ春樹、正巳って随分変わったわよねえ」

「どんな風に変わったって思うんだ？」いつものように春樹が答えた。

「だって、あんな風に自分の気持ちをストレートに言ったりしないタイプだったんじゃない？初めて来た時は、もっとシャイな感じがしたわよ」

「そうか？俺の前ではいつもああだったんだが・・・」

「人見知りが酷かったのかもしれないわね」

「そうかもしれない。だけど今でも他の女を口説く時には不器用なんだぜ」

「う～ん。それはそっちの方が良いかもよ。だって、私に対するみたいに何もかもストレートに言ったら、きっと女の子の方が困っちゃうもの」

「恋の楽しみが無くなるって言うことか」

「そうね。でも、正巳の場合、相手の思っていることが判っちゃうからねえ」

「だから相手の欲しいものを与えられる」

「それをしちゃうとあなたと同じに成っちゃうわよ。まあ彼に言わせると、あなたはそれをしたから偉いって言ってたけど・・・」

「言ってたけど・・・って言うことは、姉さんはそれが良いことだとは思ってないわけだ」

「もちろんよ。おかげで随分悩んだもの。あなたがあんなに私の思うままに私を愛したりしなければ、こんな事にはなっていないわけでしょ？」

「まあな。姉さんが知りたいと思うこと、知りたくないと思うこと、そのどちらも俺には判っていた。だけどそれは、あの時に俺が知らせたいことや知らせたくないことと同じだった。みんなそんなものなんじゃないか？要するに、必要なもの同士が集まったら、同じような幻を作り出すって言うこと」

「そうかも知れないわね。でもあなたって本当に辛抱強かった・・・」

「どう言うところが？」

「私が自分で理解しなければいけない事を教えようとはしなかったって言う意味で・・・」

「ああ、俺があの時点で死ぬって言うことか・・・。あれを思い出したときは俺だって辛かった。だけど姉さんと居るとそれをそのまま受け入れられるような気がしたんだ。それに、それを告げることの方が俺にとってはもっと辛かった。だけど姉さんは、俺が言わなくてもちゃんと知ってたじゃないか」

「そりゃあ、あれだけサインが出て居れば判るわよ。だけど私にはそれを確認する勇気がなかったわ。もしあの時私が尋ねたら、あなた答えた？」

「多分」

「それで、私があなたに死なないでって頼んだら？」

「どっちにしても姉さんの前から俺は居なくなった・・・」

「タイロンが言ったように、記憶を捨てて、すべてをやり直したかも知れない？」

「姉さんに対する愛がもう少し少なければ、そんなこともできたかも知れないが、あの時点ですでに手遅れだった。俺は姉さんを愛しすぎていた。そして、それが自分の存在価値だということも理解していたんだ。もし、あのまま俺が消えてしまっていたら姉さんはどうだったろう？」

」

「そうね、あなたと再会してからの事をすべて夢だったって事にしてしまえたかも知れない」

「だったら、五十嵐や、俺の家族達はどうかだったと思う？」

「そうね……。あなたの蒸発を受け入れるまで、随分長い時を要したんじゃないかしら？でも、それはそれでみんな受け入れるしかない。死んでしまったのと同じ事だもの」

「だけど、その時間をかけた学びを誰も必要としていなかったから、あの時の俺は肉体の死を選んだんじゃないかな。後は各々残った者達の人生だ。あの時の俺にとっては、こうなる事が最善だと思えた。こうやっていつも姉さんと一緒にいられるし、やり残していた楽しいことも経験出来る。いや、こうやっていなければ、それらは次の生に先送りだって言うこと。その踏ん切りをつけるために何度も何度もやり直したんだからな」

「そう、死んでしまってそこまで理解出来たのね。でも私はまだ生きているのよ。この肉体を持って、いろんなものと関わりながら……」

「それで早く死にたいのか？」

「そうね……。私、やっぱりそちらへ行きたいのかしら？」

「急ぐことは無い。どうせ命あるものはすべて死ぬ。その世界でそれが唯一の真理だ」

「そうね。だけど、その時期を悟るって言うことが命あるものにとって一番辛い」

「命在るもの……。それは違うぜ。正しくは欲のある者だ。死期を悟った動物達はそれを恐れはしない。俺は、それに思いが及んだ時この形に成ることを決めた」

「欲を捨てたの？」

「いや、俺の場合捨てたんじゃない。膨らませたんだよ。捨てたんだったらこの形を作り出したりはしないさ」

「確かに……。本当にあなたって尊敬に値する魂だわ」

「そうか？」私の頭の中で春樹は、照れたように笑って見せた。

「ねえ、龍はいつも『君達は何も間違ったりしないんだ』って言うんだけど、私、本当に間違っていないのかしら？この形であなたを受け入れていて、本当に間違っていない？」

「ああ、絶対に大丈夫さ。大体、何がどうなれば間違いだって言えるんだ？姉さんが楽しんでいる限りそれは正しい事だ」

「でも、上海であなた、私にこれ以上苦しみの中の楽しみを見つけさせるのはかわいそうだから、私を殺してくれるって言った……。私、すごく嬉しかった……。これまでに貰ったいろんな喜びや楽しさの中で、あれ以上嬉しい言葉って無かったな」

「そうか……。あれは俺がまだ人としての感情を残しているから出た言葉だ。あれを言った俺自身、本当にびっくりしたんだ。こんな形になってもまだ姉さんを愛する気持ちが深くなって行ってるんだって」

「そう、死んだ時点で凍結されたわけじゃなかったんだ。まだ現在進行形なのね」

「そうみたいだ。次に俺が肉体を持った時には、もっともっと愛し合おうぜ」

「大喧嘩をして、別れる経験もしてみなくっちゃね。それで私後悔するの。『どうしてあんな男と関わっちゃったんだろう。二度とあんな男の顔なんて見たくない』なんてね」

「そうだな。その経験だけはしたことが無いな。そうしたらお互いに肉体を捨てた後、顔を見合わせて笑えるかも知れないぜ」

「本当に！そこまで行けると良いわね」

「ああ」春樹が暖かな感情を私の中に満たした。

「私、眠いわ」私はそう声に出して言ってから、そのままソファに横になって目を閉じた。

深く深く眠れば、すべてが夢になるかも知れない。目覚めたら春樹が隣で笑っているかも知れない。『姉さん、よくねてた』なんて言って笑いかけてくれるかも……。そんなことを思いながら眠りの中に引きずり込まれるようにして落ちて行った。

眠る前の思いとは別に、私は一人電話の音で目覚めた。

まだ完全に目覚めきっていない体で、ふらつきながら電話の受話器を取る。

「もしもし」まだ頭もちゃんと目覚めていない。

「めぐみさん。どうしたんですか？具合でも悪いんですか？」正巳の声だった。

「ああ、正巳君。お昼寝してたのよ。どうしたの？」少し頭の中にかかった霧が晴れる。

「じゃあ起しちゃったんですね。すみません」

「あなたみたいに三日も寝ないで大丈夫なんて言う、便利な体を持ち合わせていないから」

「そうですね。昨夜は四時間ぐらいしか寝てなかったですからね」

「あなたは元気そうね」

「はい。僕はいつも三時間寝れば充分ですから」

「そう、ところで何の用？」

「めぐみさん、しばらく仕事暇だと言ってましたよね。ちょっとお手伝いいただけませんか？」

「手伝うって何を？私に何の力もないって知ってるでしょう？」

「めぐみさん、その何の力もないって言うのやめませんか？だって、僕の師匠と同じ……いいえ、それ以上の力を持っているんですよ」

「馬鹿言ってるんじゃないわよ。私はただの普通のおばさん。でも、何を手伝って言うの？」

「ただ居てくれるだけで良いんです。前の時みたいに……」

「前の時って、チャネリングのお手伝い？それだったらアンディが居るでしょう？」

「急な依頼があって、他のチャネラーが手配できないのでウォンさんにやって貰うんです。それで、僕一人ではちょっと心許なくって……」

「どう言うこと？」

「だって、もし何かあった時にウォンさん程の力のある人だったら、僕一人で押さえきれないかも知れないし……」

「これからもアンディがチャネリングをするの？」

「いいえ。でも一度やっておいてもらうのも良いと思って。この先は、僕と同じようにマッチングと立ち会いの仕事に成るんですけど。今日のは特別です」

「アンディだったら問題が起こったりしないでしょう？」

「多分大丈夫だと思います。だけど、もしもの事がありますし、僕一人ではちょっと……」

「保険みたいなものね。それって、私が必要なんじゃなくて、春樹を降ろした私の力が欲しいって言うことなのね」

「はっきり言ってしまえば……」

「最初からはっきり言えばいいのよ。それだったら仕方ないわね。何時頃行けば良いの？」

「四時からになっています。だから、三時前に来ていただくと有り難いんですけど」

「判った。それで昨日のホテルまで行けばいいのかしら？」

「ええ、あの部屋でやります。今から念入りに浄化しておきますので、よろしく願います」

「判ったわ。今から用意して行く」

「ありがとうございます。じゃあお待ちしています」正巳はそう言って電話を切った。

私は受話器を置いて大きく伸びをする。「さて、新バージョンのめぐみさんに何が出来ることやら！」と言ってからもう一度シャワーを浴びるためにバスルームへ向かった。

私は、ホテルのフロントで許可を貰ってから昨夜の部屋へ行きドアのチャイムを押す。

「めぐみ。昨日は大変だったね」ドアを開けてくれたアンディが言った。

「私、酔っぱらって失礼なこと言ったんじゃないかしら？」

「大丈夫だよ。さあ、中に入って」アンディがそう言って扉を大きく開ける。

私は「お邪魔しまーす」と言いながら中に入った。そこは、正巳が電話で言っていたように完璧に清められていた。ただ、透明な光だけがあって、他に何も無い。

その時、正巳がベッドルームから出て来て言った。「すみません。無理言っちゃって」

「あなた、完璧に清めたわね」私は正巳に笑いかけながら言った。

「ありがとうございます。昨夜めぐみさんの残した光だけは取り去ることが出来なかったですけど・・・。まずまずの仕事でしょう？」

「私、何か残していたの？」

「そうだよ。めぐみの纏うエネルギーの波が、場所に残るんだ。誰でもそうなんだよ。だけど、こんな美しい光が残る人は、滅多に居ない」後ろからアンディが説明した。

「今日のチャネリングの邪魔に成ったりしない？」私は心配になって振り向き、アンディに尋ねた。

「無問題！この光が邪魔に成るのは、梶ぐらいのものだ」

「どうして春樹には邪魔になるの？」私は驚いて尋ねた。

「まあ、立ち話も何ですから、奥の部屋で座りましょう」正巳が笑顔を浮かべて言う。

私はそれに促されて、自分の光に満ちているらしい部屋を横切る。

正巳は、ベッドのサイドテーブルにコーヒーを用意していた。

「その辺に腰掛けて、コーヒーでも飲んで下さい」

「ねえアンディ、さっきの話どう言う事？」私はコーヒーにミルクを入れてかき混ぜながら尋ねる。

「梶は君の光の中にいると、人が変わったように穏やかだ」アンディがそう言って片目をつぶってみせる。

「良く判らないわねえ」私はコーヒーを口に運び、言った。

「僕の知っている梶は、そんなに穏やかな男じゃなかった。もっと危険な男だった。大体僕達が出会ったのも梶が香港の街で問題を起している時だったんだよ」

私は再会する前の春樹を思い浮かべて納得する。確かにあいつならやりそうなことだ。

その思いを正巳が読んで笑う。「違いますよ。やくざの喧嘩じゃなくって、ウォンさんが言っているのは霊的な話です」

「な～んだ！そっちの問題ねえ。また地縛霊かなんかと関わってたのね」

「まあ、僕が聞いたところによると、そのちょっと強力な奴だったみたいですけど・・・」正巳が言った。

「悪霊の方が僕の父に助けを求めてきたんだ」アンディがため息をつきながら言った。

「悪霊が助けを・・・」私はその後の言葉がない。

「若気の至りだと思ってくれないか」突然春樹が正巳の口を使って弁解する。

「父と僕は、悪霊に導かれて梶に会った。それは荒削りな術を使う男だったよ。力だけに頼って

、自分の思いだけしか無かった。それで、父が梶を弟子として引き受けることにしたんだ」

「あの頃のタイロンは強かったなあ。俺はあの時、始めて自分の力の限界を知った。それで、弟子入りすることにしたんだ。その間ずっと俺の面倒をシャオロンが見てくれたんだよ」

「そう……。それでその後真っ当な仕事に就こうって思ったわけ？」

「ああ、日本に帰ってからすぐに会社を興したんだ」春樹が言う。

「でも、それからもずっと梶は危険な男のままだったんだよ。いくらか自分をコントロール出来るようになっただけで。でも今の梶に危険感はない。めぐみの光に満たされているからじゃないか？」

「まあな。それもあるかも知れないな。姉さんと再会してからいろんな事がどんどん繋がって、ほとんどのことを理解できたから」

「真理を知ったからって言う事か？」

「まあそんなとこだ」

「そう言えば、めぐみさんと出会って悪霊のまま居続けることの出来た悪霊って居ないですよ。めぐみさんの光のせいでしょうか？」正巳が言った。

「簡単に言ってしまうえばそうだが、その光自体が姉さんなんだ」春樹が私の口を使って言う。

「ねえ、最初の話に戻るけど、私の光が私のいた場所に残るって言うのは、場所に刷り込まれた残存記憶って言う事なの？」

「はい。誰もがその場所に微量の記憶を残している。だけど、今日五十嵐君と部屋の浄化をやってみて驚いたんだが、めぐみのそれは強力だったよ」アンディが言った。

「そうなんです。何もない状態に戻すんですけど、その後必ずめぐみさんの光が満ちて来るんですよ」正巳が言う。

「それは、姉さんの光じゃない。神の光さ。その神の光と姉さんの光が同じものだから、お前達にはそう思えたんだろう。昨日此処に姉さんが居たことによって、神と繋がる窓が開いたんだよ」春樹が私の口を使って説明した。

「神と繋がる窓って……。それっていつか出雲で私がしていた仕事の事？」いつか私は神と繋がる窓から神のエネルギーを我が身に移し、それを民衆の前に現わしていたことがあるのだ。

「そうだよ」春樹が答えた。

「じゃあ、その光がチャンネルに影響を与えたりはしないのね」私が念を押す。

「はい。だからこの光は梶にしか影響を与えないって言っただろう？簡単に言ってしまうえば、めぐみを愛するものが、どんどんその愛を深めてしまうって言う症状が出るぐらいさ」アンディが言った。

「症状って……。それって、何か悪い病気のウイルスみたいね」私が言う。

「僕もそれに感染しないようにしないと……。手遅れでなければいいけど……」

「ウォンさん。ちゃんと予防注射しておいて下さいよ。僕これ以上ライバルが増えるの嫌ですからね」正巳が半分ジョーク、半分本気のような表情で言った。

「馬鹿なこと言ってないで、私が今日呼ばれた仕事について説明してくれない？」私が言う。

「さっき電話でも言ったように、この後此処でウォンさんがチャネリングしてくれます。そのサポートをお願いしたいんです」正巳が言った。

「アンディはチャネリングしたことあるの？」私が尋ねる。

「日本語でしたことはないな……」

「そう、じゃあ、チャンネルしている時に言葉がどうなるか判らないんだ。それで、春樹を通訳に呼んだ訳？」春樹が広東語だけは覚えたと言っていたのを思い出して私が言う。

「はい。それと、土地の力が違うから、もしかしたら何か問題が起こるかも知れない」

「そう言えば、上海で土地によって神が違うとかって言う話をしていたわね」

「はい。善きモノと悪しきモノが、土地によって違うんだ。チャイナぐらい広いと、良くあることなんだよ」

「日本でもそんなに酷くはないが無いこともない」春樹が言う。

「たとえば？」私が尋ねる。

「出雲の神と日向の神では、系統が違う。そして、過去において戦っていたという歴史もある。しかし、日本の場合、歴史を重ねるうちに各王朝が結婚などで合併和解しているから、それほど顕著には現れない。けれど中国の場合、和解をするよりも征服という形を取ったために強く残っているんだ」

「歴史的背景・・・」私がつぶやく。

「少なくとも僕は、日本の神と和解したことはない。だから、この土地で降神するのはいくらかの危険を伴うって言う事さ」アンディが言った。

「アンディ、魂のレベルだと、国は関係ないわよ。だから、あなたが日本人じゃなくても、日本の神が全く初めてって言う事には成らないわ。だってそうでしょう？私達は大昔の中国で知り合っていたのよ。反対の国籍で生まれ変わったことだってあるかも知れない。それに、今あなたがこの国に居て、この国の正巳と一緒に仕事をしようとしているって言う事は、全く縁がなかったって言う事ではないでしょう？」私が言った。

「それもそうだね。この国に大きなカルマを残していなければ良いが・・・」少し心配そうにアンディが言った。

「調べてみる？」私が冗談半分に言う。

「めぐみさん、駄目ですよ。これからウォンさんには仕事をして貰わないといけないんですから」

「判ってるわよ。私は、春樹の残した力なんて本当は使いたくないの。どんなに好奇心が働いてもね。あの力のおかげで私、何度死にかけたと思う？」

「ご迷惑をおかけしています」正巳が笑いながら頭を下げて見せた。

「本当にそう思ってる？」私が言う。

正巳はそれに笑って答えない。

「五十嵐、姉さんがやりたくて引き寄せてるんだから、仕方ないよなあ」春樹が茶化すように言った。

「で、この間みたいに、ここに隠れてチャンネルを見ていればいいのかしら？」私が尋ねる。

「いいえ、今回は、僕の後ろに座って貰います。ウォンさんだったら僕がエネルギーを送る必要なんて無いですから、めぐみさんにエネルギーを送ってもらわなくても良いんです。めぐみさんが僕のそばにいてくれると、梶さんとそのまま繋がれるから・・・」

「そうね、私が傍にいれば、あなたにそのまま春樹が降りられるわね。女の私が春樹を降ろして突然男言葉で話し始めたりしたら、クライアントがびっくりしちゃう」

「そうなんです。でも、本当はそれだけじゃないですよ。何故だか意味は判らないけど、今日は絶対めぐみさんに此処にいて欲しいって感じるんです」正巳が真剣な表情で言った。

「判った。何事も起こらなきゃ良いけど・・・。でも、それって何かやばそうだわよねえ」

「やばそうって？」アンディが言う。

「危険そうだって言う意味ですよ」正巳が言う。

アンディが頷いてから言った。「必要なことしか起こらない。そして、それを起すのは、必要

な人々が力を合わせて作り出す」

「はい、判りました」私はそう言って笑って見せた。

正巳が胸ポケットを抑えて、携帯を取り出す。そして、相手を確認してからそれに出る。

正巳がちょっと込み入った感じで仕事の話をしたので、私とアンディは、清められた部屋に出る。

「私、正巳がちゃんと仕事をしているところを見るのって初めてよ」窓の傍で御堂筋を見ながら私が言う。

「昔、親子だったんだってね」アンディが言った。

「ええ、会ったことのない親子。それが多分一番新しい記憶よ。ずっと昔には、名乗り合えない親子だったことがあったけど・・・」

「いつも梶が間にいたの？」

「ええ、ずっと彼が正巳の父親だった」

「と言うことは、ずっと夫婦だったんだね」ととても優しい口調だった。

「何度かはね。いろんな事があった・・・。きっとあなたと春樹もいろんな関係で生まれ変わったんでしょね」

「残念ながら僕にその記憶はない・・・」

「そんなの無い方が良いに決まってる・・・。だって、春樹とのことを思いだして、嬉しかった事なんて何もないもの。私は、ただ彼が生きて居るときに、私を愛してくれた記憶だけが宝物」

「でも、何度も何度も愛し合ったんだらう？」

「ええ、いろんな形の愛を経験した。でも、それが全部春樹だったとは言い切れないわ。だって、その度に名前も立場も違う。もちろん愛し方もね。ただ、私達は、同じ記憶を共有しているだけよ」

「そう・・・。同じ記憶か・・・。メモリーだね」

「春樹らしい名前を付けたと思わない？最初に名刺を貰ったときに感心したのよ」

「梶の記憶」

「アンディは彼が前世を覚えてるって知ってた？」

「知らなかったよ。でも、何かの話の繋がりで不思議な事を言うことはあった。僕は、それを聞いたときに、頭の中でもぞもぞと虫が動くような感じがして、何かを思い出しそうになるんだが、僕がちゃんと思い出す前に梶は話題を変えてはぐらかしてしまった」

「きっと、あなたに思い出されると困るって思ったのよ。彼も言ってたけど、前世での繋がりは、ただのきっかけでしかなくて、現世でのつきあいは全く別のものなのよ」

「そうだね。だったら僕とめぐみが愛し合っても別に問題は無いんだ」アンディが笑いながら言った。

「ウォンさん！抜け駆けは駄目ですよ」突然正巳が後ろで言った。

「びっくりした！本当にあなたって忍者みたいに忍び寄るわね」私が振り向いて言う。

「忍者の修行をしたって言ったでしょう。でも、忍び寄った訳じゃないですよ。そんな人聞きの悪いことを言わないで下さい」

「僕は気づいてたよ」アンディが言う。

「そう、私がぼーっとしているのが悪いのね。ところでお仕事の話はもう良いの？」

「ええ、またちょっとしたトラブルです」

「大丈夫なの？」私が尋ねる。

「仕事をしていて、トラブルが無い方がつまらないですよ。でも、明日からちょっと九州へ行く

ことに成っちゃいました。ウォンさんも行けますか？」

「僕は平気。でも、めぐみは？」アンディが言う。

「えっ！私も行くの？」私は驚く。

「いいえ、トラブルは仕事関係だから問題ないですけど……。でも、ウォンさんがそう言ったって言う事は、その必要があるって事でしょうね」正巳がアンディの顔を見ながら言った。

「はい。これは、多分ヒットです」

「何がなんだか判らないんだけど……」私が言う。

「言ってなかったですかね。ウォンさんの力のこと」

「何？必要なときに必要な事が判るって言うのは聞いたけど……。と言うことは、私も行く必要があるって言う事なの？」

二人が素敵な微笑みを浮かべながら頷いて見せた。

私はこめかみが痛くなるのを感じて顔をしかめて言う。「お願いだから変な世界に私を引きずり込まないで。あなた達は慣れてるかも知れないけど、私にとってはすべてが初めてのことなんだから……。もっと十分な説明と、労りをちょうだい！」

「明日から一緒に九州へ行って貰うことになるかと今判りました。お仕事の具合はどうですか？」正巳があらためて言った。

「残念なことに仕事は空いてる。でも、私行きたくななんて無い」

「本当に行きたくないんですか？めぐみさんの魂がそう言ってるんですか？」正巳が静かに尋ねる。

「私の魂が何を言ってるのかななんて判らないわよ。ただ、こんな事ばかりに関わっていたら、ろくな事がないって思うだけよ」

「ろくな事？」アンディが尋ねる。

「ええ、良くないって言う事よ」私が答える。

「めぐみにとって何が良いことで何が悪いことなのかが問題だね」アンディが微笑みを浮かべながら言った。

「龍みたいな事を言うわね」

「今のは君の龍じゃないよ。僕が思ったことを言っただけ」

「とにかく、めぐみさん。また僕と一緒に旅行しましょう。問題が起こっているのは、福岡ですけど、ちょっと足を伸ばせば熊本の良い温泉もありますし」正巳が笑顔で言った。

「あなた、本当に……」春樹に似てきたという言葉飲み込んだ。

「良いですよ、言っても。ある意味では嬉しい言葉ですから。それに、もうちょっと脳天気になれって言われてますし」

「判りましたよ。行けば良いんでしょう？その代わりに、良い温泉と美味しいものを用意してよ！」私は自棄になってそう言った。

「君達って本当に面白い」アンディが二人を順番に見てそう言った。

「めぐみさんおなか空いてないですか？」正巳が言う。

「ええ、まだ大丈夫よ。時間はあるの？」

「後三十分ぐらいです。もし、倒れそうならおなか減っているんだったら何か用意しますけど……」

「いいえ、大丈夫よ」

「だったら、また後でご馳走しますから」

正巳は部屋の椅子を慎重に動かして、いつものように正三角形にセッティングする。今回は、一つの頂点の椅子を背中合わせに置いた。それが私の座る席だろう。そして、ヴォイスレコーダーのチェックをする。

アンディはその間部屋の隅で、太極拳のような気功のような仕草で静かに両手を回し、呼吸をコントロールして自分の気を練っていた。

「準備できました」正巳が私に笑いかけながら言う。

「この後ろ向きの椅子に私が座るのね」私が確認する。

「ええ、そうですよ。一応うちの社員として紹介しますが、気にしないで下さいね」

「メモリーの社員？なんだか身分詐称で心苦しいわね」

「でも、ボランティアの伊藤めぐみさんなんて紹介できないでしょう？」正巳が笑う。

「そりゃあそうね。ところで今日のクライアントってどんな人なの？」

「そうですね。内緒にしておきたいんですけど、そうも行かないですね」

「訳ありの人なの？別に知らないでも良いわよ」

「ちょっとした大会社の社長です」

「ちょっとした大会社って言うのも変な言い方ねえ」

「やっぱりそう言う人の上に立つ仕事の人って、あんまりこう言うチャンネルを受けるなんて言うのは外に漏れるとまずいらしいんです」

「社内で色々あるんでしょうね。精神科のカウンセリングを受けるようなものなのね」

「それがまずいんでしょう？世間的に弱みを見せられない立場の人ですから」

「そんな仕事、どこから回ってきたのよ」

「色々おつきあいがあるんですよ」正巳がため息混じりに言った。

「そうか・・・、経営者も大変ね。結局契約チャネラーでは秘密が漏れる可能性があるから、アンディにやって貰おうって言う事だったのね」

「正解ですよ。だから、一度で片づかないとまたウォンさんに来て貰わないといけない」

「その分特別料金で貰っちゃったらいじゃない。私なら面倒な仕事は割増料金をつけるな」

「それをやって詐欺として訴えられないと良いけど・・・」

「それがあなたの腕でしょう？ちゃんと説明すればいいのよ」

「梶さんよりめぐみさんの方がシビアですね。やっぱりうちの社長になってもらえませんか？」

「冗談でしょう？」

「もちろんですよ」正巳がそう言って笑った。

「ジーッ　ジーッ」電話が鳴って正巳がそれに出る。

「来たみたいだね」アンディが私の後ろに立って急にそう言った。

「びっくりした！」私はアンディが傍に来たのも気づか無かったので驚いた。

「僕は忍者の修行なんてやってないよ」アンディが笑いながらそう言った。

柊の花・・・ 4

正巳が受話器を置いて、三分程でドアのチャイムが鳴った。

正巳がドアを開け、クライアントを迎え入れる。私もメモリーの社員を装って、愛想笑いを作って挨拶をする。

そのクライアントは、どこかで見たことのある顔だったが、私にはそれが誰なのか思い出せなかった。六十歳前後の立派な紳士だ。

正巳がその紳士に椅子を勧め、アンディと私を簡単に紹介する。

「こちらが今日チャネリングをするウォンシャオロンさんです。そして、こちらは私の秘書で伊藤めぐみです。どちらもプライバシーを外に漏らすような人間ではありませんので、どうぞご安心下さい」

その紳士は、静かに頷いて見せ、「宜しく頼む」と言って正巳の勧めた椅子に腰掛けた。「先生、早速始めさせていただきたいのですが、それで宜しいですか？」

私は正巳がその紳士を先生と呼んだのが気になった。ちょっとした大会社の社長って？それってもしかして政治家？しかし全く政治関係に興味のない私には、それが誰であるのかなど判らなかつた。

「私には時間がない。そうしてくれ」

「では始めましょう。カーテンを閉めて下さい。そして、照明を消して」正巳が私に言う。そして、彼自身がスタンドライトを点灯すると椅子に座った。私もカーテンを閉め終え、壁のスイッチを切ってから正巳の椅子に背中合わせに置かれた椅子に腰を下ろし、目を閉じる。

後ろから正巳の声がした。「先生、お気を楽になさって下さい。ウォンさんお願いします」

「では、始めます。名前を言って下さい」いつもとは少し調子の違う声でアンディが言った。

「出石原正紀」その紳士の声だ。

出石原？珍しい名前だ……。そう言えばそんな名前の政治家が居たような気がする。どこか地方の知事か何かではなかつたらうか？

「出石原正紀さん。今日は何についてセッションをお望みですか？」アンディが言った。今までのチャネラーと違って、アンディはすでに繋がっているようだ。

「私は癌に冒されている。余命幾ばくもない末期癌だ。しかし、まだ何かやり残しているような気がして仕方がない。家庭も仕事もすべて完璧にやり終えたと思っている。だから、このまま死を受け入れることが出来るはずなのに、何かをやり残しているという思いに駆られて居るのだ」出石原と名乗った紳士はとても簡潔に、そして淡々とした調子で言った。

「死を恐れているわけではないのですね」アンディが抑揚のない声で言う。

「もちろんだ。この年まで生きてきて、何一つやり残したこともない。私の一生は完璧なものだった」その声は虚勢を張っているのでもなく、気負っているのでもないようだ。ただ、自分の中の思いにとまどっているようだ。

「出石原正紀さん。今心に愛を満たすことが出来ますか？」アンディが問いかける。

「言っている意味が分からないが？」

「不必要な感情を削除したいのです。今までに一番愛した女性を思い浮かべて貰うと簡単に出来ると思います」正巳が説明をする。

しばらく紳士は黙り込んだ。

「あっ！」正巳が小さく声を上げる。

正巳の体が小刻みにふるえるのが、背中合わせの椅子を伝わって来た。

「出石原正紀さん。あなたのやり残したものがあなたの目の前に居るようです」優しさに満ちたアンディの声が言った。

「私の前というと？」

私は立ち上がり正巳の震える肩をつかむ。

「五十嵐正巳。養子に出る前は、佐治正巳と言う名前でした。母親は、佐治るみ。あなたの息子さんです」私の口を使って春樹が言った。しかし、その紳士には私の声として伝わっているだろう。

「やっぱり、やっぱりるみに子供が居たのか・・・」そう言ったまま出石原と名乗った紳士は黙り込んでしまった。

「出石原正紀さん。彼は何も知らなかったのですよ。それにあなたを恨んだことも無い。確かに辛い幼年期をすごしはしましたが、それは彼にとって必要なことでした。今、あなたが此処にこうしてやってきたのも、縁と言うものでしょう。あなたが記憶の奥底に封じ込めていた五十嵐君の母親への愛が、あなたを此処へ導いてきたのだと思います」アンディは表情を変えずに静かに言った。私は、正巳の肩を掴んだまま、アンディと正巳の父親である政治家を静かに見ている。その紳士はじっと正巳を見つめ、涙が溢れてきたところで目を閉じた。

「私とセッションするよりも、五十嵐君と話された方が宜しいようです。めぐみさん席を外しましょう」アンディがそう言って席を立つ。私は正巳の耳元で「良かったわね」と言ってアンディと共に外へ出た。

私とアンディは部屋を出て、エレベーターに乗る。アンディは黙って下の階のボタンを押し、「めぐみ、五十嵐君から心を離さないで」と言ったまま黙り込んだ。

私達は、下の階にあるコーヒーラウンジに入り、二人ともコーヒーを注文する。

「びっくりしたね」アンディが言った。

「ええ、こんな不思議な事って・・・」私は後が続かない。

「必要なことが必要なときに起こるんだよ」アンディが微笑んでみせる。

私はそれに頷く。

「五十嵐君とちゃんと繋がって居るかい？」

「良く判らないわ。私、本当に自分の力の使い方って判らないのよ」私はため息混じりに言う。

「大丈夫さ。君はちゃんとやり方を知っている。君の外から危険な感情がやってこなければ、それで良いんだ」

「どんな危険があるって言うの？」

「それは判らない。ただ、五十嵐君は今生まれて初めての感情を体験しているだろう。彼の押し込められていた悲しみを解放するんだ。普通の人よりもそれが強く出る可能性がある。彼はそれだけの力を持って居るからね」

「でも、親子の対面ですもの、そんなに大変なことになったりはしないでしょう？」

「今君はどんな気分？」アンディが優しさを込めた目でじっと見つめながら言った。

「なんだかちょっと辛い感じかな？」

「そう・・・。五十嵐君は嬉しい訳じゃないんだね」そう言ってアンディは、運ばれてきたコーヒーを何も入れずに飲んだ。

私はコーヒーにミルクを入れてかき混ぜながら言う。

「複雑だと思うわよ。だってあの子、本当に自分の父親については何も知らなかったんですもの

。母親に尋ねることすらしなかったのよ」

「彼の優しさかな？」

「そうね、母親に対する優しさと理解した方が良いわね。でも、多分彼の弱さだったんだと思うわ。愛おしい人の弱さ……。私、そんな弱さを持った人というものが大好き」

「そうか……。弱いから人なんだね」

コーヒーを一口飲んで、カップを置いてから私が言う。「正巳は、その弱さを克服するために実の父親を引き寄せたのかも知れないわね」

アンディはカップを持ったままウインクしてみせる。

「必要なときに必要なことがやってくるのね」私がまたため息混じりに言った。

アンディはカップを置くと、大きく手を伸ばして私の頭を掴んで言う。「いい子だ」

私はもう一度大きくため息をついて言う。「あなたまで……」

「良いじゃないか、僕の方が年上だ。かわいい妹の頭を撫でたって悪くない」アンディが笑いながら言った。

「あれっ？アンディって春樹と同じ歳じゃ無かったの？」

「はい。僕の方が五つ上だよ。だから、梶は弟」

「そう、若く見えるわね。でも、この年になって、年上だとか年下だとかってあんまり関係ないわよね」

「でも、君は五十嵐君のことを年下だからって避けているじゃないか」

「避けているわけじゃないわよ。だって私ずっと彼に助けられているし……。それに彼のことが大好きよ。ただ……」

「ただ、どうしたの？」

「自分でも判らないのよ……」

「そうだね。判るときが来れば判るさ。今君は幸せなんだろう？」

「ええ、それは間違いないわ」

「じゃあ今はそれで良い」アンディはそう言ってまたウインクして見せた。

「今はね……」私もそう言って微笑んで見せた。

「ところでまだ辛いかい？」

私はじっと自分の感情を味わう。「そうね、少しましになったかな？でも、まだ少し辛いわ」

「そう、でも、少しずつ楽になってるんだね」

「ええ、だけどこの辛さはきっと無くなりはしないわ。これは人の持つ根元的な悲しみと辛さよ。正巳はそれを再認識するために父親を引き寄せたのかも知れない」

「きっと君を愛し続けるために必要なことだったんだよ。そう、儀式だよ」

「儀式？」

「そうさ。それを持っていても良いんだって言う事を確認しているんだ」

「アンディって本当に優しいのね」

「そうかい？でも、妻には逃げられたけど……」

「優しさは人を傷つけるから……。でも、その傷を癒すのも優しさよ」

「生きて愛するって難しいね」

「だからって言って、死んじゃった奴も居るけど」

「死んでも、それから逃れられないみたいだけどね」

「確かに」私はそう相づちを打って笑って見せた。

「ところで、あなたは正巳のことどう思ってるの？」私は改めて尋ねる。

「梶の宝物かな？もちろんめぐみもだけど」

「恋愛対象では無いの？」

「めぐみ。僕はこれから五十嵐君の会社の仕事をするんだよ。恋愛感情なんて持ってたらきつとうまく行かないよ。あんなにめぐみのことを愛しているのに、それを邪魔するつもりなんて無いよ」

「それ、ちょっと違うわよ。恋愛感情に枷をつけることは出来ないわ。私は別にあなたと正巳がそう言う関係になっても全然気にしない。気にしないって言うよりも、それが一番自然な形のような気がするのよ。でも、男同士じゃ正巳の望んでいる子供は出来ないわね」

「そうだよ。それにもう僕にそう言う楽しみは必要ない。もっと素晴らしい一体感って言うのを知ってしまったし・・・」

「あなた、人としての幸せを捨ててしまうつもりなの？」

「いや、そう言う訳じゃないけど・・・」

「駄目よ！人として生まれた限り人として生きないといけないのよ。生きているうちに神や仏に成る必要なんて無いの。宇宙と一体になるのも素晴らしい感覚かも知れないけど、それ以上に個に別れた人と繋がることの方が大切なよ。それが同性であっても異性であっても同じ。別に体の繋がりがなくても良いんだけど、別れて生まれたって言う事は、お互いに繋がろうとしているって言う事に他ならないんだから」

「難しいことを言うね。めぐみは宇宙と繋がったことある？」

「判らない。だって、私は宇宙そのものだって知ってるもの。そのあなたの言う宇宙が神であって、愛でもあるって思い出してしまったし・・・」

「思い出す？」

「そうよ。私は知ったのでも信じているのでもない、思い出したの・・・。だから、疑いようもないし、信じることを止めることもできない。だからこそ、人として生きて行くしかないって思っているの。いろんな摩擦を起しながら、辛いことや悲しいことを楽しみに変えて生きていく。もちろん、早くこんな体を捨ててしまいたいって思うことは多々あるけどね」

「でも、それも出来ないんだね」

「そう、だって誰も私を殺してくれなかったから」

「梶に殺して貰うまで、そうやって生きてるって言ってたよね」

「ええ、それがあいつとの約束だから。でも、そんな約束なんてどうでも良いのよ。だって、生まれてきた限り死ぬ。それがこの世界での唯一の真理だって春樹も言ったのよ。死んだ奴にそんなことを言われると説得力があると思わない？」

「確かに。でも君は、生きて居る人と愛し合う必要があるよ。梶はもう死んだんだ。そのことをちゃんと心に沈めた方が良いね」

「ありがとう。きっといつかまた誰かと愛し合える日が来るわ。今はそれが誰なのかは判らないけど、私は諦めないで生きていることにしたの。だって自殺できるほどの根性なんて持ち合わせてないし」

「そうだね。僕もまた恋をするよ。もしかしたら僕の息子がどこかに生きているかも知れない・・・。生きていればその子供と会うことだって出来るからね」

「あなた、そんな酷いことをしたことがあるの？」

「いや。多分大丈夫だと思うけど・・・。五十嵐君と出石原さんみたいな事だってあるからね」

「それにしても男の人って不便ね。自分の子供が居るかどうかも判らないなんて・・・」

「それもそうだ。それにしても梶はどうだったんだろう？」

「さあ？遺産問題でもめたって言う話は聞かなかったけど」

「梶ぐらいだと、十人やそこらの子供が出てきてもおかしくないと思うんだが・・・」

「シャオロン、お前も酷いことを言うなあ。その点俺は抜かりなく遊んだんだよ」春樹が突然私の口を使って言った。

「どっちにしても遊んだんでしょう？」私が私の意志で言う。

「まあな。それが俺の楽しみだったんだから。だけど、五十嵐の父親は、三十年も前のことを良く思い出したよなあ」

「そうね。死期を悟って、どうしてもるみさんとの事が気になったんでしょうね」

「そうだな」

「でも、出石原さんって、若い頃あなたに似てたんじゃないかしら？」

「どうして？」

「何となくあなたが歳をとったらあんな感じじゃないかって思ったの」

「僕もそう思ったよ」アンディが言った。

「そうかもな。それはるみに聞いてみると良いよ。彼女は、あの人を愛していたから黙って身を引いたんだろう・・・」

「そうか・・・。そうよね」私が言う。

「ねえ、梶ってもしかしたら五十嵐君のお母様とも・・・」アンディが恐る恐る尋ねた。

私はそれに笑ってみせる。

アンディは大きく首を振ると呆れたように言う。「めぐみ、君は本当に強い人だ。それだけのことを知りながら、まだ梶を愛し続けているなんて・・・」

「あなたは？」

「僕は、梶の結婚を聞いた時点で、裏切られたと思ったよ。それで自分も結婚することにしたんだ」

「対抗心から？」

「良くは判らないけど、梶が誰かのものになってしまうって言うのが堪らなかったんだ」

「なるほど・・・。でも、春樹は誰のものにも成らなかった」

「そうだね。もちろん僕のものにも成らなかった・・・。でも、今の梶はめぐみのものだ」

「ありがとう。そう言って貰えるとほっとするわ。だって、いつも春樹と正巳で私の所有権を論じるのよ。変でしょう？」

「あいつはそう言う言い方で愛を表現するんだ」

「シャオロン良いことを言うなあ・・・」春樹が口を挟む。

「黙ってなさいよ。あなたは死んでるんだから」私が春樹に言ってから続ける。「アンディは、今春樹を愛してる？」

「そうだね。死んだ男に捧げる愛としては最上級の愛を持っていると思うよ。奴が生きていたときには、友情という名前に自分の思いを変えようと、嫉妬心を抑えるのに随分手こずりもしたけど、今はその必要がないから・・・」

「あいつはあなたにも随分辛い思いをさせたのね。それでも春樹のことが好きだったんだ」

「俺は、シャオロンに友情なんて求めてなかったぜ」春樹が言う。

「そうだな。だけど、そんなお前を愛し続けることの出来る人間なんて、世界中探しても居ないんじゃないか？」

「此処にいるじゃないか」私の口を使った春樹が、私の鼻を指さして言う。

「それはどっちだ？梶か？めぐみか？」

「どっちもだよ。どっちも同じものなんだ。俺は、自分を愛した。世界一のナルシストさ」

「そうかも知れない……。僕はまだお前ほど自分を愛していないのかも知れないな」

「春樹の生き方ってのはた迷惑よね」

「確かに」アンディはそう言って笑って見せた。

「私おなか空いてきたんだけど……」

「君の中の辛さはどうなった？」

私はまた心を静めて感じてみる。「もう大丈夫みたいよ」そう言ったときにアンディが私の後ろに向かって手をあげて合図をする。私も振り返ると、正巳がラウンジに入ってくるころだった。

「めぐみさん、今日はありがとう御座いました」正巳がぺこりと頭を下げる。

「もう済んだかい？」アンディが優しい声で言う。

「ウォンさんも本当にありがとう御座いました」少し赤くなった目で正巳が言った。

「どういたしまして。ところでめぐみがおなか空いたって言ってるんだけど……」

「上のレストランで席を取っています。行きましようか？」正巳が私の両肩に手を置いて、私をのぞき込むようにして言った。

私はそんな彼の頬に軽くキスをして、「後十分後だったら、あなただっただけで頭からむしゃむしゃ食べられるぐらいの空腹よ」と言う。

「十分早くて良かったです。さぁ行きましよう」

正巳はそう言って伝標を手にとって、レジに向かった。

「大丈夫そうだね」アンディが笑ってみせる。

「良かった……」私もそう言って微笑んで返した。

正巳はそのホテルのメインダイニングの席を取っていた。私達は、案内されて奥まった席に着く。

「何か食べたいものありますか？」正巳が尋ねる。

「何でも良いわよ。あなた達に任せるわ」私が答える。

それを聞いて頷くと、正巳はアンディにメニューを渡して言う。「美味しいものはウォンさんに任せるのが一番です」

アンディは笑いながら頷く。「後で後悔しても知らないよ」

「大丈夫です。今日は経費じゃなくて僕のおごりですから、何でも食べて下さい」

「じゃあ、僕が選ぼう」アンディがそう言ってボーイに次々と注文を告げる。そしてワインを選んだ後正巳に言う。「これは僕のおごりだよ。お父さんとの再会のお祝いだね」

私達は運ばれてきたワインで乾杯をした。それはさすがに香港の大金持ちが選んだだけあって、ワインのことが良く判らない私が飲んでも感動するほど上質なものだった。

「美味しい！私こんな美味しいワイン、今まで頂いたことがなかったわ」

「それは良かったね。初めてのことは何でも素晴らしい」アンディが私の書いた龍の物語で主人公が言ったせりふと同じ言葉を口にした。

「ねえ、アンディ、あなたいつもそう言う言い方をするの？」

アンディが首を傾げる。

「あなたの言葉って、龍の言葉と重なることが多いのよ」私はそう言ってため息をつく。

「不思議なことなら掃いて捨てるほどあるよ」アンディが私に片目をつぶって見せた。そして、正巳に向かって尋ねる。

「五十嵐君、君はお父様を許せたかい？」

正巳は大きく首を振ってから言う。「いいえ、あの人は父じゃないですから……。あの人は母の大切な人です。僕にとっての父は、僕が葬った五十嵐の父と、此処まで育ててくれた梶さんだけで充分です。出石原さんは僕に遺産を分けるとかって言うてくれたけど、僕は断っちゃいました。だって母はそれを避けるために今までずっと僕の父親に対して沈黙を守り続けてきたんですから。その母の思いを無視する事なんて出来ない……。あの人に会って、母がどれだけ僕を愛していてくれたのかも判りました」

「名前でしょう？」私が言う。

「ええ、あの人の名前を貰って付けてくれたみたいです……」

「で、正巳はどうだったの？本当の父親と会って」

「僕は、めぐみさんが上海でお祖母様を見分けたみたいには、判らなかった。今日会うまでに二度会ってたんですけどね。あの人が母を思い出すまでは、自分の父親だなんてこれっぽっちも思わなかったんです」正巳はそう言って少し寂しそうに笑って見せた。

「私の場合写真を見たことがあったもの。でも、あなたやっぱり似てたわよ。さっききっと春樹が歳をとったらあんな感じなんだろうなって思ったの。そして、春樹とあなたも似てる。つまりあなたと出石原さんも似てるって言う事よ」

「半分はあの人の血ですから。でも、なんだかすっきりしたな。だって、今までであることが判っていたのに無視し続けてきたものを、ちゃんと目の前に置いて確認できたって言う事ですから」

「そんなに怖いものでもなかったでしょう？」

「そうですね。でも、母はまた愛する人を失うことになるのかって思ったら……。ちょっと可哀想です……」

「そうねえ。そう言えば末期癌だって言うてたわね。あなた、るみさんに会うようになって言ったの？」

「はい、母にとっては大切な人ですから、命在るうちに一度会いに行行って欲しいって言いました」

「それで行くって言うてた？」

「ええ。母は、やっぱり僕が思っていたように、なんにも言わずにあの人の前から居なくなって、そのままだったみたいです。それで旅館の話をしたら、必ず行くって言うてました」

「るみさんらしいわね……」

「でも、本当にみんないろんな人生を送っているものですね。なんだか僕なんて幸せな人生を歩いてきたって感じますよ」正巳はそう言って晴れやかに笑って見せた。

「あなたにそう言われると、感慨深いものがあるわねえ」私も笑いながら言う。

「ところで僕が居ない間ウォンさんと何を話していたんですか？」

私とアンディは顔を見合わせて笑う。そしてアンディが言う。

「めぐみは僕と五十嵐君がつき合えば良いって言ったんだよ。信じられないだろう？」

正巳は私を睨み付けるようにして言う。「めぐみさん。僕は男が好きな訳じゃないって言ったでしょう。それにこんなにめぐみさんのことを愛しているのに、どうして判って貰えないんですか」

「そう言う訳じゃないけど、なんか、そうなればいいなあって……」私は正巳の迫力に負けて口ごもる。

「それがめぐみの愛し方だろう？」アンディが笑いながら言った。

正巳は笑顔をアンディに向け、大きく頷くと言った。「そうなんですよ。こんな女性を愛すると、男は苦労が絶えません」

「その苦労が一番の楽しみなんだ」アンディがそれに答える。

私は運ばれてきた料理を黙って食べる。それを見て正巳が言う。「沢山食べて下さいよ。めぐみさんに頭から囓られたら堪らないですから」

「ええ、そうするわ。だってこれの方がきっとあなたより美味しいもの」そう言えば、このせりふもあの物語にあった……。どこかで何かが繋がりはじめている……。何が起こり始めているんだろう？私はいったい誰？周りのものがなんだかぼやけてきているような気がした。

「めぐみさん！あなたは伊藤めぐみですよ！」突然正巳の声がそう言った。

私は大きく首を振って彼を見る。何となくピンぼけの彼の顔がそこにある。そして、その顔に違う顔が重なろうとしている。

「めぐみさん！しっかりして下さい！めぐみさん！」正巳が立ち上がって私の後ろに回り、耳元で呼んだ。

『めぐみ、私は伊藤めぐみ。まだ此処に居続けたい』私は心の中でそうつぶやいて振り向く。そこには満面の笑顔を浮かべた正巳が居た。

「それで良いんです。まだ此処にいて下さいね」正巳はそう言うと自分の席に座った。

「めぐみ、君はどうしてそんなに不安定なんだ？」アンディが真顔で言った。

「めぐみさんは欲張りなんです。でも、しばらくは一人に出来ませんね」

「私どうしちゃったの？なんか変だったわよねえ」

「また何処かへ行きかけてただけですよ」正巳は何事もなかったようにそう言って、食事を続ける。

「ねえ、それって分裂症とかって言う病気？」

「そうですね。精神分裂じゃなくって、離魂、つまり何かのきっかけで魂が離れるんですよ。その指輪、めぐみさんが望んでも魂を離せないようにチャージし直した方が良いかも知れないですね。ちょっと急激にバージョンアップしすぎたから、自分の力を制御できていないのかも知れない」

「こんな事って良くあるの？」

「めぐみさん以外で、そんな形でその力を持った人なんて居ないですよ。他の人は一つづつそれを身につけて行くから、使い方が判らない力を持ったりしないですからね」

「私、どうしよう……。このままだとまずいんじゃないのかしら……。」だんだん不安感が増してくる。

「大丈夫ですよ。僕の傍に居さえすれば、ちゃんと呼び戻してあげます。とにかくしばらく僕の傍を離れないで」

「なんだか罨にはまったような気がするわね」

「どっちにしても明日は一緒に九州まで行って貰うわけだし、二～三日はおとなしく僕の傍にいて下さい」正巳はそう言って笑って見せた。

「五十嵐君。随分逞しくなったね。この分だとちゃんと梶の後をやっていけそうだ」アンディが感心したように言った。

「ありがとうございます。でも、まだまだ梶さんには及びませんから、お力添えをお願いします」そう言って頭を下げて見せた。

私は訳の分からない不安感にエネルギーを与えないようにするために、目の前の美味しい料理

を楽しむことに集中する。

「そうだね。その方法が一番良いよ」アンディが笑いながら言った。

「アンディ、あなたも私の心の中が判るの？」私は驚いて尋ねる。

アンディはまたウインクをしてみせると自分も食べ始めた。

食事を終えて、正巳はアンディに翌日の予定を告げ、私を自分の車に乗せた。

「めぐみさん。取りあえず僕の部屋まで一緒に来て下さいね。それで僕は明日の荷物を作りますから、それを持ってめぐみさんの部屋へ行きましょう」運転しながら正巳が言った。

「あなた、家に泊まるつもり？」

「もちろんですよ。今のめぐみさんを一人にするわけにはいきませんからね」

「私、いったいどうしちゃったのかしら」私は呟くように言う。

「上海でちょっと違うところと繋がる道が出来ちゃったんですよ。それで、何かのきっかけでそっちへふらふらと迷い込んでしまうんです」ハンドルを握り、前を向いたまま正巳が言う。

「そう……。だったら多分龍の物語だわ。さっきも龍の物語と同じせりふって思った途端になんとか変に成っちゃったから……」

「ウォンさんがいけなかったのかなあ……」

「そうかも……。だって彼ってあまりにも似ているんですもの」

「だけど、めぐみさんはそれを必要としているわけですよ。だから、それを引き寄せた。そして、僕はその物語と戦うんだ」

「戦うの？」

「違いますね。楽しむんですね」正巳はそう言って笑顔を向けた。

柗の花・・・ 5

「ねえ、私なんかがついて行って邪魔じゃないの？」博多行きの新幹線の中で正巳に尋ねる。
「大丈夫ですよ。今日は僕一人行けば良い仕事ですから。社長の肩書きを持っているものが行って、丁寧に謝って説明をすれば片づきます。だから、秘書の役もやって貰わなくて良いですよ。ウォンさんと少し時間を潰して下さい。多分二～三時間で片づきます。それに明日は土曜日だし、温泉旅行にはちょうど良い休暇です」

「そう言えば、昨日は秘書だったのよね」私が呟く。

「本当に僕の秘書に成って貰えませんか？」

「昨日は社長で、今日は秘書なの？嫌よ。私今の仕事気に入ってるもの。それにちゃんとお勤めしたこともないし・・・」

「時間通りに起きて仕事へ行くって言うのが苦手なんでしょう」正巳が笑う。

「そうよ。自由気ままに仕事するのが楽で良いのよ」私も笑って返す。

私は身を乗り出して、通路を挟んで座っているアンディに尋ねる。

「アンディは九州へ行った事ってあるの？」

「初めてだよ」アンディが答える。

「日本で住んだ事は？」

「随分昔だけど、言葉を覚えるために一年居たよ。それで梶がこっちへ戻ってから何度か来た。遊びのこともあったし、仕事のこともあった」

「お仕事？」

「風水の仕事で呼ばれたりするんだ」

「そう、日本にも風水を気にする人って居るんだ」

「はい。最近特に増えてきた」

「アンディはメモリーの建物、どう思う？」私はあの霊達に囲まれた不思議なビルを思い浮かべながら尋ねた。

「ああ、あれね。あそこは龍穴のなれの果て。梶がいつもそう言ってた。僕も初めて行ったときはびっくりしたけど、梶らしいと言えばあれほど梶らしい場所はない」

「そうでしょうか？でもあそこまで持っていくのって結構大変だったんですよ」正巳が言う。

「そうだろうね。だけど良くできてるよ」アンディが頷きながらそう言った。

「龍穴って、いろんな条件を満たさないといけないんでしょう？」私がうる覚えの知識で尋ねる。

「はい。龍穴って言うのは、自然の力を全部味方に付けた場所だからね。でも、あそこは昔誰かが龍を呼んで人工的に作った龍穴。めぐみは風水の勉強したことある？」

「何冊か本を読んだけど、私の頭じゃ無理ね。あれはもっと若いうちに始めないと、この年になってあんなに難しいことを沢山覚えるのは無理よ」

「必要があれば入るんだけどね」アンディが自分の頭を指さしてそう言った。

「正巳は風水の勉強もしたの？」

「僕はまだやってないんです。梶さんが居てくれましたからね。でも、やっぱり僕もちゃんと覚えた方が良いのかな」

「そうだね。少しづつ覚えると良いよ」アンディが優しい笑顔で言った。本当にアンディは正巳に話しかけるときの優しい顔をする。

「そうだ、ウォンさんに風水セミナーを日本でやって貰いましょう」

「それはかまわないけど、君はそんなに手を広げて大丈夫なのかい？」

「大丈夫ですよ。梶さんが居た頃からしたら、随分仕事を減らしてますから。それに、セミナーだったら実績はあります。それをやりながら僕も覚えればいいわけですし」正巳が嬉しそうにそう言った。

「若いって良いわねえ」私がため息混じりに言った。

「めぐみさんも一緒に覚えればいいじゃないですか」

「結構よ。そんなの私の仕事には必要ないし、あなたが覚えればそれで足りるわけでしょう？必要なときにはあなたに聞けば良いんですもの」

「お金取りますよ」正巳が笑う。

「でもねえ、風水的に最悪の場所に住む事に成っちゃうのも、それなりに必要があるって言う事でしょう？でなければそんなところに引き寄せられないもの。私は全部そのままが良いんじゃないかって思う。その場所に居て酷い目に遭うのも、風水の力でそこから抜け出すのも、どちらにも何かしら楽しいことが隠れているはずよ。安全な場所ばかりではつまらないでしょう？」

「まあ、そう言うことですね。でも、それを言ってしまうと、僕達の仕事は全部必要ないことになってしまいます」

「そうじゃないわよ。風水によってそこから抜け出すのもって言ったでしょ？あなたのやっているセミナーも、アンディの風水も、どちらも必要な人に必要なときに伝えるためにあるのよ。春樹だってそれに気づいたからやり続けていたんじゃない」

「そうですね。梶さんはいつもそう言っていましたね。ウォンさん、さっきの話進めても良いですか？」正巳は改めてアンディに尋ねる。

「構わない。どうせ乗りかかった船だ」

「乗りかかった船か・・・、アンディって本当にいろんな言葉を知ってるわねえ」

「言葉は呪術の根本だからね」

早めの時間に乗ったので、午前中に博多駅へ着いた。

正巳は、くれぐれも私を頼むとアンディに言うと、そのまま駅のすぐ傍にあるビルへ入っていく。

アンディの希望で太宰府へ行くことになり、私達は駅前からタクシーに乗る。

「どうして太宰府なの？」

「前に日本に居た時、京都の北野天満宮の近くに住んでたんだ。その時良く散歩で行ったんだよ。それで、菅原道真公縁の神社だから、行ってみようかって思ったんだ」

「そう。しっかり日本の神様とも縁を結んでるんじゃない」私がそう言って笑う。

「すっかり忘れてたよ」そう言ってアンディも笑う。

「でもアンディ、道真公って祟り神よ」私は運転手に聞こえないように、声を落として言う。

アンディは静かに頷いてみせる。私が続ける。「そして、道真公の魂はニギハヤヒに繋がっている・・・」

「ニギハヤヒって？」

「春に私達が言いくるめてしまった、古代の神様よ」私はそう言って笑って見せた。

アンディは首を振って見せただけでその時はそれ以上尋ねなかった。

車は渋滞もなく、三十分ほどで目的地に着いた。

両脇に土産物屋の並ぶ表参道を歩きながら私が言う。「正巳はちゃんとやってるかしら」
「彼は、結構立派にやってるよ。会社の中ではちょっと威厳が足りないみたいだったけど」
「若いから仕方ないわよね。でも、ちょっと頼りないぐらいの方が、みんなが助けてくれるでしょう？」

「そんな感じだね。それに、社員がフレンドリーなのは、梶が作った社風だから」

「そうですね。あの人が偉そうにふんぞり返ってる姿なんて想像もつかないわ」

「でも、梶は怖い男だった・・・」

「私は学生の頃の彼と、死ぬ前の二ヶ月ぐらいしか知らないから、仕事をしている彼って想像できないよ」

「そうか、学生の頃の友達だったんだ」

「ええ、そうよ。彼はクラブの後輩。会社へ行ったのもつい最近正巳に連れて行かれたのが初めてだったの」

「それであの幽霊達のことを知ってたんだね」

「そう。あそこで春樹の残した残像に出会ったのよ」

「あれか・・・。あれは僕が消しておいたよ。五十嵐君は自然に消えるまでそのままにしておきたかったみたいだけど、いつまで残しておいても仕方ないし、あの部屋の主は、今は五十嵐君だからね」

「そう、ありがとう。あなたの優しさって何処か春樹に似てるわね」

「似たもの同士が愛し合ってたんだよ。でも、僕は梶ほど強くはない」

「彼のは強さじゃなくて、無鉄砲なだけよ。本当に自分勝手ではた迷惑な奴だったの」

「厳しいね」

「ええ、あいつには随分傷つけられたもの」私はそう言って笑う。

私達は、参道を抜け、鳥居を潜り太鼓橋に出た。

「住吉さんみたい」私が言う。

「前に何かで読んだけど、此処のは三つ繋がってるみたいだよ。過去、現在、未来を繋ぐものなんだって」

「じゃあ、まず過去を越えて行きましょうか」私が言った。

アンディは先に橋に足をかけ、振り向いて私に手をさしのべる。

「足下小心」アンディはわざわざ日本語の読み方でそう言って微笑んだ。

「ありがとう」私はそう言ってその手を取った。

「この橋が結界になって居るみたいだね」アンディが言う。

確かにその橋から向こうは、そこまでの空気と色が違っている。

太鼓橋の頂上に立ち止まってアンディが続ける。「ほら、楼門からエネルギーがあふれ出しているよ」

「あなたにも見えるのね。私にはそんなにはっきりは見えないわ。でも、なんだか此処の気も悲しみを帯びてる」私はそう言ってまた足下に注意しながら橋を降りる。

一つ目の橋を降りきって、右手にあるお社に軽くお辞儀をしてから平橋に差し掛かる。

「めぐみのはどんな感じなの？」

「私のって？」

「君の感覚だよ」

「ああ、それなら大したことはないわよ。私に必要なことがやって来た時だけなにかを感じる

程度。あなた達みたいにいるんなものが見えたり、聞こえたりするわけじゃなくて、もっと漠然とした感じかな。目を閉じればそれを見ることは出来るみたいだけど……。それは春樹が置いていった力よ」

「なんの修行もしていないんだね？」

「ええ、全くの素人」私はそう言ってアンディに笑いかけた。

アンディも優しく微笑みながら、「それなのにそれだけの力を持ってしまったんだったら、歪みも出るね」と言った。

「そうみたい……。正巳に迷惑をかけっぱなし」

私達は現在を現わしているらしい平橋を渡り終え、未来の太鼓橋に差し掛かる。

「こんな風に過去現在未来がしっかり別れていると良いね」アンディが言った。

私も頷きながら言う。「私はこの上を行ったり来たり……。過去と現在の境目すらないわ。その上、全然違う現在まで被さっていて、どうしようもない感じよ」

「君には、この未来の橋が一番大切かも知れないよ」

私は立ち止まってアンディを見上げる。アンディが続けた。

「君の中には未来に対する執着がない。より良い明日を願う気持ちが無いんだよ。ありのままを受け入れてしまったことが、その欲を消してしまったようだ。だけど、昨日君が言ったように人として生き続けるのにはやはりそれは必要なものなんじゃないだろうか」アンディはそう言い終わると立ち止まったままの私の手を引いてまた歩き始める。

私も彼に手を引かれながら未来を現わす橋を渡り終えた。

右手に大きな手水舎が在り、その前で橋を渡るときに繋いだままになっていた手を離す。

「五十嵐君に見られたら、また叱られるところだった」アンディがそう言って笑った。

「本当に恋に対しては子供っぽいよね。三十にもなってまだ恋に恋している段階なのよ」私はそう言って柄杓を取ってまず左手を清め、柄杓を持ち直して右手を清め、そしてもう一度右手に持ち直して左の手のひらに水を受けて口を清めた後、柄杓の柄を清めて戻す。

「それが本式のやり方かい？」アンディが私の所作を注意深く見ながら言った。

「大体ね」私はハンカチで手を拭いながら答える。アンディも同じように両手と口を清め柄杓を清めた。

「良くできました」私はそう言ってハンカチを差し出す。

私は楼門の前に立ち、自分の気を静める。すると強い風のような気がそこから流れ出しているのを感じた。そこで一礼をしてから中にはいる。目前左右に有名な飛び梅の木が在った。しかし、今はもう枯れ葉の季節だ。それでも目を閉じるとそこに残された梅の香りの記憶を感じる事が出来た。そう、あれは今年の早い春。大阪城の梅林でのこと。残存記憶として其処に残された飛び梅の香りが、私の記憶を呼び戻す。それは迷路のように、幾重にも重なり、出口の判らなくなった記憶……。

「めぐみ。しっかりしなさい」アンディの声がした。

私はハッとして我に振り返り向く。そこには春樹に良く似た笑顔をしたアンディが立っていた。

「ほら、しっかりしないとまた五十嵐君に叱られるよ」アンディが優しく言う。

「大丈夫。梅の香りで感傷に耽ってただけだから。これは普通の感情だわ」

「梅の香りなんてしないだろう？」アンディが言う。

「そうね。だけど私にはそれが感じられたのよ」

「土地に残った残存記憶だね」

「ええ、私って、花の香りと記憶が結びつきやすいのかも知れないわ」

「それで梅の香りと何か繋がつたんだね。でも、今は香っていない。だからそんなに悲しまなくて良いんだよ」アンディが私をのぞき込むようにして優しくそう言った。

私はそれに頷いて見せてから、小さく呟く。「この感情は愛するものを失った女の悲しみだわ。私、あんなに悲しんだのに、まだ悲しみ足りないのかしら」

「愛おいしい人だ・・・」小さな声でアンディがそう呟いた。そして、気を取り直したように言う。「ほら、道真公にご挨拶しなくっちゃ」

私も振り返って本殿前に向かってゆっくり歩く。

本殿の正面に立ち、鈴を鳴らし、賽銭を入れる。足の裏で大地を確認するようにしてまっすぐに立ち、上体を伸ばしたまま腰から折るようにしてゆっくり二礼する。そして、またまっすぐに上体を起し、胸の前で両手を合わせ、右手を少しひいてから大きく手を開いてゆっくりと二度拍手を打つ。胸の前で合掌したまま「どうぞこれまでのように私をお導き下さい」と心から祈った。最後にもう一度深く礼をしてから軽く頭を下げて社殿の前を退いた。ゆっくりとやったので全部で三分ほどかかっただろう。アンディがそれを見ていて言った。「神主以外の人がそうやって礼拝をしているのって初めて見た。日本人って、作法を重んじるのに、神社ではほとんどの人がいい加減にお詣りしているからね」

私は笑って見せてから言う。「これが本式かどうかは判らないわよ。ただ、私の体がこの方法を思い出したの。拍手を打つことで体を軽くするのよ。何度も打つと、軽く成りすぎて舞い上がっちゃうから普通の時は二回だけ」

「君は舞い上がったことが在るの？」

「ええ、何度か・・・。昔そう言う仕事をしていたことが在るみたいだから・・・」

「なるほど。それで梶が、君が居ると神と繋がる窓が開くって言ったんだね」

「多分。でも、本人にはなんの自覚もないのよ。さあ、あなたもあなたのやり方でご挨拶しておけば？作法なんて関係ないし、此処に奉られている人にご挨拶すればそれで良いから」

アンディは軽く頷いてみせると、前に進み、流れるようなスムーズな動きで、二礼二拍手一礼の日本式礼拝をした。

振り向いたアンディに言う。「間違いなくあなたは、日本に生まれたことがあるわね」

アンディが首を傾げる。私が続ける。

「だって、普通の日本人よりずっと美しく礼拝をしたもの」

アンディはそれを聞いて少し肩をすくめて首を傾げて見せた。

私達は道真公にご挨拶を終え、本殿横の出口から内陣を出た。其処には根本を柵で囲われた大きな楠がそびえ立っていた。

「千年以上は経っているね。あの木は、きっと道真公も知っている」アンディが楠の木を見上げながら言った。

「そうねえ、木ってずっと同じところに立ち続けて、じっと人の営みを見続けているのよね。自分が動かない分、長い時をかけていろんな事を体験するんだわ」

「何があってもただそれを受け入れ、自己の成長のみに意識を置いているんだろうか？」

「自己の成長か・・・。私はあんなに大きくなりたいくないわ」私はそう言って笑う。

「確かに・・・」アンディもそう言って頷いて見せた。

その時私の携帯電話が鳴った。正巳からだった。私は太宰府にいることを告げると彼もこちらへ向かうから小一時間待つようにと言って電話を切った。

「正巳がもう少し此処で待って」

私達は、大きな木を見上げながら他愛のない話をした。

「そう言えば君はさっきタクシーの中で神様を言いくるめたとかって言ってたね。その話をしてくれ無いかい？」

「ああ、ニギハヤヒの話ね。ずっとずっと昔、まだ日本って言う国がちゃんと出来ていなかった頃に生まれていた私と春樹の話よ。日本では神話の時代って呼ばれて居るぐらい昔の話」

「君と梶の前世かい？」

「良くは判らないの……。でも、同じ魂の記憶を持ってみたい。だけど、そのニギハヤヒって言うのは名前を取り上げられて封じ込められているから、そのままの感情がヤマトの土地に残っていたのよ。それで私達三人で彼と話して、復活したいって言う彼を丸め込んだのよ」

「どういう意味？」

「つまり、今の時代に彼が復活しても、全然楽しい事なんて無いって教えてあげたの。それで違う名前のまま祀られていても良いんじゃないかって。だって、祀っている人達はその名前でも、ニギハヤヒ自身を祀っているつもりなんですもの」

「名前の呪術か……。梶が得意にしていた」

「そうみたいね。彼はそれが一番単純且つ強力だって言ってた」

「それで上手く行ったんだね」

「大体ね。私は、自分で生まれ変わって自分を祀れって言ったんだけど、本当にそう言う記憶を持った魂の人が現れたのよ。だけど、結局その人の記憶を読んで、自分はこの時代に合わないって判ったみたいで、お供えしていたお酒を飲むだけ飲んで帰っちゃった」

アンディがはじかれたように笑う。「そう言うところが、梶の性格と似てたわけだ。酒が好きで女が好き、それで諦めの良いところなんか……」

「そうね。今言ったとおりの神様だったわ。だけど、彼はこの国で一番大きな神よ」

「大きな神？」

「そう、沢山の名前で、全国各地に奉られているの。その名前を全部集める事なんて不可能だった。それで名前の呪術を解くことが出来なかったのよ。本当は自由にしてあげたかったんだけどね。だから、取りあえず春日の神と言う名前のニギハヤヒだけは納得して貰ったけど、此処の菅原道真公って言うニギハヤヒの魂を受け継いだ者はまだそのまま悲しみ続けていると思う」

「悲しみ続けているのかい？」

「そうよ。だって、此処に入るときにその悲しみを感じたもの」

「どうして道真公とそのニギ……なんとかって言う神様が同じだって思うんだい？時代も全然違うし、もちろん名前も違う」

「そうねえ、何となく判るのよ。何処か、決定的に、それも根本に関わる部分が似てるの。それに、あのニギハヤヒ以外にこれだけ強く崇り、なおかつ人々に愛され続ける魂なんて考えられないわ。居るとしたら彼の父親だったスサノオだけ。でも、スサノオは出雲に完全に封じ込められている。彼はあのニギハヤヒの父親であり、この国最強の龍使いだったんですもの。だから、息子のニギハヤヒをもってして、スサノオを押さえ込んである」

「確か、日本の神話では、スサノオとアマテラスが姉弟だったよねえ」

「そう、でもアマテラスって言うのがニギハヤヒの別名でもあるの。もちろん対抗勢力の中に太陽神を奉る巫女としてのアマテラスが居たことは居たんだろうけど、人々はスサノオの息子であるニギハヤヒにその名前を被せて祀っているのよ。ニギハヤヒの諡号がアマテルクニテルヒコア

メノホアカリクシミカタマニギハヤヒの命って言うのよ。勝手に読み方を替えているだけで、漢字で書けば同じ天照よ。諡号って言うのは、死んだ後に付けられる名前だから、後の人がスサノオとの関係を利用するためにその名前を使ったんだと思う」

「アマテル・・・って言う名前なんだね」

「そうよ。結局自分達の祖神天照大神を祀っていると見せかけて、ニギハヤヒを鎮めているの」

「多重的になってるわけだ」

「多分ね。でも、本当かどうかは判らないわよ。私がそう思うだけだから・・・」

「それも思い出したのかい？」

「ええ、はっきりとって言う訳じゃないけど」

「日本の歴史書ではどうなっているの？」

「さぁ？どれも神話としてしか捉えられていないみたいよ。日本では、最初に縄文人と言う野蛮な人々が居て、その後弥生人って言う文明を持った稲作人がやって来て、始めて国が出来たみたいな大雑把な感じで歴史を教えているから・・・。まあ、私が知らないだけで、いろんな研究をしている人は居るんだろうけど、そんなの歴史の授業では教えないの」

「日本人は、自らの歴史を消去してしまったんだね」

「多分戦争で負けちゃったからじゃないかしら？あなたの国にも随分迷惑をかけちゃったみたいだし、色々反省したんじゃないの？」

「君はそれについてどう思ってる？」

「そうね、そんなに簡単に割り切っちゃいけないような気がするわね。それに、上海でワン老人が言ったみたいに、ずっとずっと昔には同じ民族だったかも知れない・・・。魂に国の観念は無いわ。国を必要としているのは、肉体に縛られた人間だけ。迷惑をかけた国の人間がこんな事を言うのは不謹慎かも知れないけど、同じ学びのために違う国の人々が力を合わせて戦争をしたのかも知れないし・・・。ごめんなさい」

「僕に謝っても仕方ないよ。でも、それを聞いたら僕の国のほとんどの人は怒るだろうね。だけど、僕は別に怒りはしないよ。確かに魂の世界に国の観念は無さそうだからね」

「ありがとう」

アンディはそれに微笑んでみせる。「だけど、自分達の歴史を持たない民族って悲しいね。自分達の魂のルーツを持たないって言う事だからね。その野蛮人が自分達の祖先だなんて考えたらぞっとしないのかな？」

「あんまり深く考えないんじゃないの？でも、さっき言ったスサノオやニギハヤヒって間違いなく縄文人よ。だから、たまに私に降りてきたみたいにして自分達の復権を試みるんじゃないかしら？」

「それで君に言いくるめられちゃう訳だ」アンディがそう言ってまた私の頭を掴む。

「まあね」私は文句を言うのを諦めてそう言ってから、また大きな楠の木を見上げる。

何千年も其処に立ち続けるってどんな感じなんだろう？この大木は何を見、何を思って生きてきたのだろうか？

「僕、菅原道真だったことが在るような気がする・・・」アンディも楠の木を見上げながら呟くように言った。

「そう・・・。それは辛い過去生ね。思い出さない方が良いと思うわよ」私が言う。なぜなら、道真公は、憤死と呼ばれるような死に方をしたのだ。そして祟り神と化した。そんな人生を思い出して、楽しいことなど在ろうはずもない。

「そうだね。これ以上思い出さないようにするよ」アンディは自分の足下に目を落としてそう言

った。

「やっぱり、日本との繋がりがあったみたいね。それに、ニギハヤヒと繋がる魂だったって言う事は、あなたも春樹も同じ様な魂だって言う事・・・」

「さて、僕は何をしにこの国へ帰ってきたんだろう？」アンディが言った。

「帰ってきたのか・・・。あなたが語学に堪能なのも、道真公の生まれ変わりだとすれば納得できるわね。だって、今は崇り神としてより学問の神様としての方が有名なもの」

「語学は話すだけじゃ駄目なんだよ。僕はある程度会話が出来るようになったら、その国の文字を覚えて、その国の本を読むんだ。そうすれば語彙が広がる。そして、その国の人々がどんな風にものを考えるのかも理解できるからね」

「そう・・・。随分努力するのね。それも呪術のため？」

「それだけでもないけど・・・。日本語の場合、梶の存在があったから」

「そうね。でも、あいつ本なんて読まないタイプだったから、あなたの方が沢山読んだんじゃないの？」

「梶が勧めてくれるのは漫画ばかりだったよ」そう言って笑う。

「でも、漫画って日本の文化よ。今の日本人を知るにはもってこいのテキストだったんじゃないの？」

「その通り。だけどどんな漫画より梶の方がエキサイティングだったけどね」そう言って片目をつぶってみせる。

私達は、未来、現在、過去の順に三つの橋を渡って、参道に戻る。

「何処かでお茶でもしない？」

私がそう言うと、アンディが首を振って言う。「そんな時間無いみたいだよ」

「どうして？」

私が尋ねるとアンディが微笑んで言う。「心をすませてください？」

そう言われて私は自分の心の中を覗く。しかし何も判らない。

「何も判らないわ」私がそう言うとアンディが前を指さす。「ほら、もうすぐ其処に君を愛する人がやってくるよ」

数秒後正巳が携帯電話を操作しながら歩いてくるのが見えた。そしてすぐに私の携帯が鳴った。私はそれに出て言う。

「目の前にいるわよ」

正巳は目を上げると私達を見つけ手を振った。私もそれに手を振って見せてから隣を歩くアンディの方を向いて言う。

「凄いわねえ。それって予知能力なの？」

アンディが笑いながら首を振る。「違うよ。五十嵐君のエネルギーを感じたんだよ」

「そうなんだ。それだと待ち合わせですれ違っちゃう事なんて無いわねえ」

「便利だろう？」

「あなた達って本当にどうなってるの？人間の枠を越えてない？」

「そうじゃないよ。本来人間が持っている力をちゃんと使っているだけさ」

「だからそっと忍び寄った人の存在も感知できたわけね」

「めぐみだって判るはずだよ。君は梶の力をそのまま受け継いでいるんだろう？」

「何が判るはずなんですか？」目の前に来た正巳が言った。

「あなた、早かったわね」

「ええ、そんなに混んでなかったから」

「タクシー？」

「いいえレンタカーを借りました。このまま熊本までドライブですよ。ところで何が判るはずなんですか？」

「エネルギーだよ」アンディが言う。

「アンディはあなたを見つける前にあなたのエネルギーを感じて、傍まで来ているって判ったのよ。でも、私には判らないから」

「そうですか。それは訓練ですよ。僕だって此処へ近付くに連れてめぐみさんとウォンさんのエネルギーが近付くを感じましたから。でも、細かいところはこれの方が确实です」そう言って自分の携帯を振って見せた。

「私、訓練なんてしたくない！」私はそう言って笑う。

「良いですよ。めぐみさんはそのままで。さあ、行きましょう」正巳はそう言うと、自分が来た道を引き返す。

アンディは私に笑顔を見せると、ウインクして見せてから正巳の後に続いた。

柊の花・・・ 6

私達は、太宰府の傍の店で軽く昼食を取り、正巳の運転する車で出発した。アンディが助手席に乗り、私は後ろの座席に乗り込んだ。

「何処まで行くの？」私が尋ねる。

「阿蘇の麓の温泉ですよ。二時間もかかりません」正巳が答えた。

私はそれに頷いて見せてから目を閉じる。正巳とアンディは仕事の話などしている。静かな調子の二人の声を聞くとともに無しに聞いていると、静かに眠りに入っていった。

「めぐみさん着きましたよ」正巳の声で目が覚めた。其処は小高くなった場所で、周りには雄大な景色が広がっている。

「此処、何処？」

「赤水温泉ですよ」

私は自分の荷物を持って、車を降りる。そして山の空気を胸一杯に吸い込んで、大きく伸びをした。

迎えに出たボーイが、私達三人分の荷物を持ってロビーに案内してくれる。

「めぐみ、此処は凄いね」アンディがそっと耳打ちするように言った。

「気持ち良いわよね」私もそれに頷く。

正巳は一人でロビーカウンターに行ってチェックインする。

私とアンディは立ちつくすようにロビーから見える、雄大な阿蘇の景色に見とれていた。

「ウォンさん！めぐみさん！行きますよ」正巳がそう声をかけながら私達の傍に来る。

私とアンディは何となく微笑みながら振り返る。

「何か良いことでもあったんですか？」そんな私達の顔を見比べながら正巳が言った。

私とアンディは顔を見合わせて頷いた。

私達はホテルの従業員に案内されて、エレベーターで最上階まで行く。正巳は、そのホテルで一番良い部屋を取ったようだ。

部屋にバッグをおいた従業員が下がると、私は窓辺に立って外の景色を堪能する。

「そんなに急いで見なくても、明日も此処にいるんですよ」正巳が言う。

「でもあなた、此処、凄いわね」

「普通じゃないよ」アンディも言う。

「ええ、でも本当はもっと凄い温泉地もあったんですよ。だけど、そっちだとゆっくり出来ないかも知れないと思ってちょっとずれた所にしたんです」

「もっと凄いて？」ソファーにゆったりと腰を下ろしたアンディが尋ねた。

「天然の龍穴の上に在る温泉ですよ」

「君は行ったことがあるのかい？」

「はい。昔梶さんに連れて行って貰ったんです。あまりに気が強すぎて、三日間一睡も出来なかった」そう言って正巳が笑った。

「いつ頃の話し？」私もソファーに腰を下ろして尋ねる。

「入社してすぐの夏でした。梶さんが突然僕を車に乗せて此処まで来たんです」

「楽しい思い出？」私が言う。

「そうですねえ、でもあの時から僕はそれまでの友達を失ってしまったんです」

「それまでの友達って？」アンディが言った。

「式ですよ。此処で梶さんが式を封じたんです」

「そうだよ。阿蘇の気を借りてやったんだ。でも、あの後そんなに寂しくはなかつたらう？」
春樹が突然私の口を使って言った。

「あれからずっと梶さんが傍にいてくれましたから」正巳もなんの抵抗もなくそれに答えた。

「梶は、その龍穴の存在を知っていたのか？」

「知り合いに教えて貰ったんだ。だけど、実際に其処を見るまでそんなに期待はしていなかったがな。まあ、俺の力だけよりも、少しでも気の強いところの方がやりやすいだろうと思ったんだ。だけど、着いてみたら本当に驚いたよ。まず、阿蘇の外輪山を越えただけで、此処に満ちている気と同じレベルだ。その上、その場所に着いたら此処の十倍以上のエネルギーだった」

「十倍！」アンディが驚きの声を上げる。

「そうなんですよ。だから、今回は其処にしなかつたんです。だってこれ以上今のめぐみさんにエネルギーを与えるとどうなるか判りませんからね。此処でも僕一人だと絶対に恐くて来れなかつた」

「此処は天然のピラミットだよ。この土地には、大昔に此処に在った一万メートル級の阿蘇山の残存記憶があって、噴火で山が無くなった今でもそれが残っている。つまり、高さ一万メートルのピラミットの内部にいる感じだな」春樹が私の口を使って言う。

「そう言うことか……。それなら納得できる」アンディが頷きながらそう言った。

「でも、正巳はなぜ阿蘇を選んだの？」

「そうですね。懐かしかったのかな」そう言って少し顔を赤らめた。

「そうか……。」私もそう言っていつも彼がするように、彼の頭を掴んで揺すった。

「めぐみさん……。」正巳は文句を言いかけたが、そのまま黙った。

私は、そんな彼に微笑んでみせる。

「めぐみ、此処の神は、君の神と同じ系列かい？」アンディが尋ねる。

「さあ？調べてみないと判らないけど、そんなに嫌われている感じはしないから、大丈夫じゃないかしら？」

「明日、阿蘇神社へ行ってみましょう」正巳が言った。

「その、此処の十倍もあるって言う龍穴にも行ってみたいな」アンディが言う。

「良いですよ。その為に車を借りたんです。何処へでもご案内します。とにかくあさっての夜、もしくはその次の月曜日の朝一番で大阪に戻れば良いんですから」

「あなた、そんなに休んで大丈夫なの？」

「めぐみさん、世間みんなお休みです。それに今日はちゃんと仕事をしたわけですから」

「そう、お仕事上手く行って良かったわね」

「はい」正巳はそう言って笑って見せた。そして、その後携帯の着信を確かめる。

「沢山電話が入っています。ちょっと向こうの部屋で仕事してきます」そう言って、そのままその部屋を出て行った。

その間私は、また窓の外を眺める。

アンディはその場で気を練っているようだ。軽く目を閉じ、静かな深い呼吸をして居る。窓ガラスに映るそのアンディの周りを、青い炎のように揺らぐエネルギーが取り巻いているのが判った。私は、振り向き、肉眼でそれを確認する。初めはガラスに映すほどははっきりとは見えなかつたが、アンディのエネルギーが強まるほどに、私の目にもそれが確認できるようになった。

私は試しに目を閉じてみた。すると、アンディのエネルギーは、肉眼で見るのとは比べものに

ならない強さで、深い湖のような碧色、まるで上質のサファイアのように輝きながらその部屋いっぱい広がっていた。

「そうか、そんなに自分のエネルギーを張り巡らせているから、それに引っかかるものが判るんだ」

静かに目を開けたアンディがそれに頷いてみせる。「自分のエネルギーの場をいつも意識して保っていれば、他の人のそれが交わってくるのが判るんだ。それに、五十嵐君の場合だと、彼自身もかなり大きなエネルギーの場を持っているから、どっちもの距離を合わせると、普通の人よりも遠くからお互いの存在を知ることが出来る」

「さっき、ガラスに映ったあなたのエネルギーが見えたの。それで振り返ったら、肉眼でもなんとなく見えた。それで目を閉じて春樹の力を使ったら強い光としてあなたのエネルギーを見ることが出来たの。でも何故ガラスに映った方が良く見えるのかしら？」

アンディが頷いて答える。「写真に在るはずのない何かが写っているって言う事が有るだろう？あれと良く似たものだよ。人の目が見ているものは、半分は記憶なんだ。その記憶って言うのは、其処に残されたものじゃなくて、生きてきた体験に基づく記憶。人は見ているものと知っているものを混ぜ合わせて認識している。半分は、こういう形のものだって言う希望的認識が被さっているんだね。しかし、ガラスやレンズを通して見たときには、それがぐんと減る。だから君がガラスを通して其処に何かが在ることを確認した後には、在るという認識が出来ているから、肉眼でも見えたわけだ。水晶占いって言うのも同じ原理だよ」

「そうか……。テレビや映画を見ているのと同じ事だもんね。日常と違う空間が其処に写っていてもそんなに不思議じゃないってことね」

「そんな感じ」

「じゃあ、一度認識してしまえば、それは常に見えるのかしら？」

「必要が在ればね。君は梶と出会う前と今では、普通の状態で何か変化は無かったかい？」

「そう言えば、何となくけど前よりエネルギーを感じるようにはなっているわ。それまでは気のせいで済ませていたことが、そうじゃなくなっているから。なのに私にはまだその使い方が理解できていないの」

「それは、君がそれを望んでいないからだよ。それを使いこなすには、その力を使って何をしたいか、何が出来るのかを見つける必要が在るんだ。普通は、こう使いたいという必要があって、それに対して答えの形でその力が現れる。しかし、それだけでもないんだ。今の君のように何か違うものを求めているにもかかわらず、それが手に入ってしまうこともある。だけど、それは思っていたものとは形が違うだけで、やはり必要なもの。だから、君もその力を持ってしまったのなら、それが君の望んでいたものにどう変わっていくのかを楽しめば良い」

「もしかして、あなた龍？」

「今話したのは君の龍。だけど、僕の知識でもある」アンディが笑いながら言った。

「やっぱりややこしいわねえ」私はため息をつく。

私はいったい何を求めていたのだろうか？それすら自覚できていない私に、それを楽しむことなど出来るのだろうか？

「前に人は全知全能だって言う話をしたよね」龍の意識だ。

「分霊だって言う事よね」私はそれに答える。

「そう。だから魂のレベルだと、何でも出来る。それも覚えている？」

「ええ」

「それが出来ないと思えるのは何故だったんだろう？」

「それは、人が魂の声に耳を貸さないから。で、魂が望んだ通りになっているのを、人の健在意識が否定して、思い通りにならないって思っているだけ」

「それで良い。だから、君の魂が必要な状態を作り出し、それを君が今体験している。そして、それを否定したがつている君の健在意識すら、魂が望んでいるんだよ」

「良く判らないわねえ」

「つまり、君はその矛盾を選んで引き寄せ居てるって言う事」

「じゃあ、私は悩みたくてこんな状態を選んどの？」

「・・・」龍の意識を持ったアンディが微笑んでみせる。

「判ったわよ。その通りだわ。私はこうして悩んだり迷ったりするのが大好きなの。そうしながら次の道を見つけていくのよ。いつもそうだった。それが私のやり方なのよね。でも・・・だったら今の私は何を見つけようとしているのかしら？」

「それは君が知っていることを誰か、必要のある人に伝えるためにじゃないかい？」

「必要のある人に伝える。それって春樹がやった事じゃない・・・」

「そうだね。その為に君は春樹君を作り出した。だけど、彼の持っていた情報と、君の持っている情報は同じものの違う部分。だから、その伝え方も違って来るだろう。彼が伝えようとしたのは、その力の使い方だった。そして、君の伝えたいものは、それが何なのかと言う事じゃないのかい？だから、それが使えるようになったものに、その本当の意味を伝えなければならない。それが君の本当にやりたいことだと思うよ」

「龍！今になってそんなことを言っても、私、どうすればいいのかなんて判らないわ」

「今だから言えるんじゃないか。だって、君がそれを見つける前に言ったら、君は本当に自分が知りたかったことを誰かに教えて貰うことになるんだよ。そんなの君は受け入れられるかい？」

「・・・確かに・・・。そうよね。私は私の見つけたものしか信じられないわ。それに、あなたのことを本当に認める前にあなたからその話をされても、絶対に信じないし、多分それ以前の問題として、あなたと話すこともしていない」

「だから、君は何も間違っていないし、不必要な時を過ごしたわけでもないって言う事だね」

「確かに、そのようね」

気づくと正巳がにこにこ笑いながらすぐ後ろに立っていた。

「龍と話していたんですね」正巳が言う。

「ええ」私はまだ龍の言ったことを深く理解するために考えていた。

「多分、今龍が言った事って、コンピュータに喩えると判りやすいんじゃないですか？」正巳はそのままソファーに腰を下ろして続ける。「僕は、その使い方を知っているんです。要するにパソコンの操作方法ですね。だから、それをどう使えば便利なのか、何をしたいときにはどの機能を使えばそれが出来るのかを知っているわけです。パソコンの使い方を習うように、師匠についてする修行などで体験的に身につけたわけです。だけど、めぐみさんはその機能を使う必要がなかった。パソコンを使わなくても時間をかければ同じだけの情報を集める方法がありますからね。それでもめぐみさんはそういう便利な機能が人には備わっているということを知ってしまっていた。それでめぐみさんは、それがどういう意味があって備わっているのかを考え続けてきたんじゃないですか？僕のようにそれを使う状況にいと、使ってしまうとそれで終わり。それについて考える必要なんて無いですからね。現に僕はその力があるために、その力を必要とする現象ばかり作り出してしまい、それに対処するだけで手一杯ですから。でも、めぐみさんはそれをする必要がないから、その元となる理論というか、理のようなものを探り続けていたんですよ。そして答え合わせのために梶さんや僕を作り出した。その答えが多分めぐみさんの言

う『愛』なんじゃないですか？」

「そうだね。だから、その力を使おうと思わない者にその理は必要ない。それよりも、全く違う意味で伝わる可能性がある。けれども、その力を持ち、それを使って行く上においてめぐみの持っている情報は必要なものだ。十進法でものを考えている者にそれを二進法で説明しても全く違うものとして伝わってしまう。二進法で出来たものを使っているものにとってもそれが理解できなければ、その使い方が広がっていくことはない。簡単に言えば、一つ在る二つ在る三つ在ると言う考え方をしている者に、在るか無いかだけの世界で説明すると無理が出てしまうだろう。そして魂の世界のことはその在るか無いかの世界に近い。それが陰陽だ」アンディが彼自身の意志で龍の言ったこと補足した。

私はまだ首を振ってみせる。

「めぐみさんは、理解することを恐れているんですね。案外かわいいところも在るんだ！」正巳が笑いながら言った。

「案外は余計よ！それと理解できていないわけじゃないのよ。私は疑り深い。だから、言葉を鵜呑みにしたりしない。いつもそうなんだけど、同じ事を何度も何度も言って貰ったり、同じ事を何度も考え続けることによってそれを心の奥底まで沈めるの。そうしている間に奥底の方から昔体験的に知っていた記憶が浮かび上がってきて、それが沈もうとして居るものと出会って真理になるのよ。それと私が今抱えている疑問って言うのは、根本的に今の人間にその力が必要なのかどうかって言う事。だって知っていても知らなくても人は間違わないのよ。だったら知らないままで良い。私の知った真理なんて私の中に閉じこめたまま生きている方が絶対に楽に生きられそうな気がするのよ」

「めぐみ、確かにそれも正しい。けれども、君はそれを知ってしまった。君の知った『人は何も間違えない』と言う論理からすると、それも間違いであるはずはない。ならば、楽に生きられないかも知れないが、君の目的を果たすべきなんじゃないか？いや、君がどう考えようとそうやっていくのも真理だ」アンディが言った。

「楽ではないけど、楽しいって言う事が・・・」私がため息混じりに言う。

「そうですね。めぐみさんもいい加減に諦めると良いですよ。そうすれば、楽と楽しいが同じになるかも知れない」正巳が明るい声でそう言ったのけた。

私とアンディが顔を見合わせて笑う。

「良いわねえ、若いって」

その夜正巳は、約束通り極上の温泉と食事を用意してくれていた。

地球のエネルギーの溶け込んだ温泉。そして壮大な自然に育まれた熊本牛。それに、その自然の中で泳ぎ回っていた川魚や、大地のエネルギーを吸って育った野菜達を、良い腕の職人が料理しているのだ。それらを極上と言わずに何をもって極上とするのだろう。

私達は、それらをゆっくり、そして存分に楽しみ、阿蘇の大自然の気に抱かれて眠りについた。

朝早くに目覚めた私は、一人で大浴場へ行く。そして、肌から大地の力を存分に吸収した。浴室の窓から、朝靄に煙る阿蘇も見える。とても気持ちの良い朝だ。

部屋に戻るとアンディが一人で部屋の中で舞っていた。それは、私の書いた物語の中でエディがいつもそうしているのと同じ。静かに跳躍し、音もなく着地する。そして、水の中のようにゆっくりと両手を動かし、一つ一つの筋肉や筋を伸ばしたり縮めたりしている。

私は心の中でそっと「エディ」と呟いた。

一通りの運動を終え、額に汗をにじませたアンディが言った。「おはよう。僕の名前覚えてる？」

「おはよう。ええ、大丈夫よ、アンディ」

「良かった。僕もお風呂に行ってくるよ」アンディは優しく微笑むとそう言って部屋を出ていった。

私達は朝食を終えて、正巳の運転する車で阿蘇カルデラの中に広がる街の中を走る。

お天気は、朝出ていた霧も晴れ、真っ青な空が広がっている。其処に満ちている気も、昨日と変わらず心地良いものだった。そして目的地に近づくに従ってその気が益々強くなっていく。

「なんだか此処は日本じゃないみたいだね」アンディが言った。

なだらかなアップダウンの在る広大な草原が広がり、この季節にしては暖かな日差しの中、茶色と黒の牛が草を食んでいる。

「本当ね。あなたは日本って言ったらごみごみした都会しか知らなかったんでしょ？」

「はい。大阪、神戸、京都、東京」アンディが答えた。

「北海道へ行けばもっと広い草原も在るんですよ」正巳が運転しながら言う。

「そうですね。私行ったこと無いから判らないけど。でも、此処阿蘇って山と言うより海の気に近いような気がするわ。昔からずっとそう思っていたのよ。此処を思い出す度に、夜の海をイメージするの」

「あれっ？めぐみさん阿蘇は初めてじゃなかったんですか？」

「ええ、此処には何度も来ているわよ。私九州生まれだって言ってなかったかしら？」

「そうだったんですか」

「でも、三歳ぐらいに両親と共に大阪へ出て来ちゃったから……。だけど夏休みなんか祖母の家に帰省してたのよ。それで、従兄弟に連れてきて貰ったりしたわ。だから、子供の頃に、草千里で馬に乗ったことだって在るのよ」

「なのに此処の気を感じてあんなに驚いていたの？」アンディが尋ねる。

「だって、二十年ぶりなのよ。その頃には気持ち良い場所だとは思っても、今みたいにダイレクトにそれを感じる事なんて無かったもの。だから此処の気にと言うより、それを感じている自分に驚いていたのよ」

「なるほど。だったら此処の神様に嫌われていることは無さそうだね」アンディが言う。

「さあ？それは判らないわよ。嫌われていたから三歳で追い出されたのかも知れないじゃない」

「でも、そんな風には思えないんだろう？」

「後で阿蘇神社に行ってみないと判らないけど、多分大丈夫だと思うわ」

「ここからじゃ感じられない？」

「そうね。此処に満ちている気は、神のエネルギー。その神とは純粹なるエネルギーって言う意味。今までの経験から行くと、神社へ行くことによって其処に祀られている、名前のある神としての人格と言うか、神格が判るのよ。もしかして、それが溢れ出すのを結界を張って防いでいるのが神社の役割かも知れないわね」

「なるほど、元人であった神の記憶か」アンディが言った。

「もうすぐ着きますよ。ほら、馬に乗るところもあります」正巳が車のスピードを落とした。

正巳は、ロープウェイ乗り場の傍にある大きな駐車場に車を止めた。私は、車を降りて立ちつくす。

車の窓ガラスを通してではなく、直に周りを見回すと、すべてが透明感に溢れ、其処にある自然の物も人工の物も何もかもがエネルギーの固まりで在ることが判った。それはつまり、自然も人工も区別するべきではないと言う事だ。それを私は一瞬にして理解した。

私は大きいため息をつき正巳を見ると、楽しげに笑った彼と目が合った。

「大丈夫ですよ」正巳が言う。

「ええ、多分」私が答える。

「ロープウェイで山頂まで登りましょう」

「確か、乗り場の隣に神社があったと思うけど」私がうろ覚えの知識で言う。

「在りますよ。此処が後で行く予定になってる阿蘇神社の奥の宮です」

正巳に誘われ、駐車場を横切りコンクリート造りの神社の前に出た。其処には先にアンディが辿り着いていた。彼は何処にも力の入っていない状態で直立し、静かに佇んでいる。「ウォンさん、どうですか？」

アンディは不思議な微笑を湛えて静かに振り向いた。

「なかなか良いよ」アンディがまた向き直って私達に背中を向けて答えた。

「めぐみさんはどんな感じですか？」

「なんだか不思議な感じよ。それにしてもコンクリート造りの神社って言うのも変ね」

「確か、古い建物は昔の噴火で壊れちゃったんですよ。それで、噴煙にも耐えられるようにこれにしたんじゃないですか？」

「そうですね。御祭神は誰？」

「磐龍彦の荒御霊」アンディが振り向いて答えた。

私と正巳は静かに柏手を打って、そっと礼拝をした。そして私が言う。「早く登りましょう」

正巳は頷いて私の手を取ると、ロープウェイの乗り口に向かって歩く。

ロープウェイは、ちょうど到着したばかりのようで何人かの人が降りてきていた。正巳は三人分の切符を買うと、一枚を私にくれ、アンディを目で探す。

「多分、自分自身の魂と語り合ってるんだと思うけど」私はそう言って外の神社を指さす。

「自分自身の魂ですか？」正巳が言った。

「だってさっき彼が神の名前を言ったとき、まるで自己紹介をして貰ったみたいな気がしたもので」

「えっと、磐龍彦でしたっけ？」

「ええ。でも、そろそろ呼んできた方が良いわね。ロープウェイに乗り遅れちゃうわ」私が言う。

正巳が頷いて、外に出ようとしたところに、アンディが入ってきた。

「やあ、ゴメン」とも清々しい笑顔でアンディが言う。

「もうロープウェイが来てるわよ」私がアンディにそう言いながら、正巳に渡されたチケットを振ってみせる。正巳はアンディにもチケットを手渡すと振り向いて私に笑いかけた。

私達は、随分古びてしまったロープウェイに乗り込み並んでシートに腰掛けた。

「アンディ、磐龍彦さんとの出会いはどうだった？」

「なかなか興味深いものが在ったよ」アンディは優しく微笑んで答えた。

「じゃあ、一宮の方も楽しみになったわね」

アンディは照れたように微笑むと窓の外に目を向け、言う。「今回の日本は、随分昔のことを思い出す」

「きっと正巳が居るからよ」私がふざけて言う。

「僕のせいですか？」正巳が驚いたように言った。

「そうよ。あなたと居ると、いつも不思議なことばかり」

「またあ」正巳が膨れて見せた。

「良いじゃないか、誰かのせいだと思っていると気が楽になることも沢山あるからね」アンディがそう言って笑った。

何もかもが自分の決めたとおりに現れる。決して誰かのせいと言うことなどあり得ないのだ。それを心の底から理解しているもの同士が、言い合うことの出来る冗談だ。

「ねえ、でも磐龍彦ってとっても素敵な名前ね」私が言う。

「そうかい？」

「ええ、とっても強そうだし、優しそうでもある。名前だけで結構得点が高いわね」動き出したロープウェイの窓から外を見ながら言う。

「それは、僕に恋をしたって言う事かい？」アンディが言う。

「本当ですか？」正巳が驚いて言った。

「まさか？大昔に此処に居た神様よ。憧れはしても、恋には成らないでしょう？」

「じゃあ、僕に憧れてくれるんだ」アンディが正巳をからかうように言った。

「ウォンさんは菅原道真でもあり、磐龍彦でも在ったんですか？」正巳はどちらへともなく尋ねた。

「どっちも同じものに違う名前が付いているだけよ。アンディの今回の来日は、その頃にやり残していたことを済ませてしまうためでもあったのかも知れないわね」

「めぐみ、今いろんな事が変わろうとしているんだ。それは僕達だけの变化ではない。今肉体を持っている魂達と、肉体を持っていない魂が、力を合わせて何かを為そうとしている。僕や君達の变化と、すべての魂の変化は連動しているんだ」

「そうか……。前に春樹が、肉体を持った魂は個に別れてはいるが閉じては居ないって言ってたわ。私が何かに気づくだけで、それをわざわざ言葉にして誰かに伝えなくても、すべての人の気づきに繋がるって」

「そうさ。僕は今日これから、磐龍彦の思いを昇華させる事になるだろう。それは僕の過去生でのカルマだ。しかし、そのカルマの昇華を欲しているのは、肉体を持った個人の僕ではなく、肉体に別れていない魂なんだ。上手く説明できているだろうか？」

「ええ、大丈夫よ。あなたが言いたいのは、神がそれを欲しているって言う事でしょう？そしてその神が私達自身でもある」

アンディがそれに頷いて見せた。

「じゃあ、神はこの現実世界をどう変えようとしているんでしょうか？」正巳が尋ねる。

「正巳、変えようとしているのは、神じゃない。人の魂よ」

「判っています。それにしても神と人がだんだん判りづらくなってきましたね」

「それで良いんだ、そうしている内にすべてが神であるという認識が出来上がってくるから」アンディがまた、とても優しい表情で正巳にそう言った。

軽い衝撃と共に、ロープウェイが山上駅に着いた。私は手すりに捕まってゆっくりとプラットフォームに降りる。其処には硫黄のにおいが立ちこめている。

「私、なんだかこのにおいを嗅ぐと、気持ちが落ち着くのよねえ」

「変な人ですね。たいていの人はこのにおい苦手ですよ」

「きっと、子供の頃の楽しい思い出と繋がっているからよ」私はそう言いながら、ロープウェイの薄暗い駅舎を出た。

外には明るい光が満ちている。コンクリートで作られた丸い待避所が幾つもあり、ゴロゴロした石と火山灰が死の世界の風景のように広がっている。その灰色の地面と空の抜けるような青さが不思議な対比を見せ、夢で見た地獄のようなイメージを与えている。こんな場所を誰かに地獄と教えられ、その人に手を引かれて歩く夢を見たことがあるのを思い出した。

私は足下に注意しながらゆっくりと火口へ向かう。ふと目を上げるとアンディが、足が地面に着いていないかのようにスルスルと登って行く。

私は振り返って、私を気遣うようにゆっくり歩いてきた正巳に笑いかける。

「何が起こるんでしょうね」正巳が小さな声でアンディの後ろ姿を目で追いながら言った。

「この旅はアンディの為にあるみたいね」私もそう小声で答える。

アンディは、火口の縁の一番奥まで行き、両手を大きく空に向けて二本のアンテナのように広げた。その彼の体の回りに、透明な光がまとわり付いている。昨日見たサファイヤブルーだけでなく、エメラルドグリーン、ターコイズブルー、うすいイエロー、深い赤など、いろいろな色が混ざり合い、絶えず動いている。

少し離れたところで私と正巳は立ち止まり、それを見ながら言う。

「あんな宝石、一つ欲しいわねえ」

「めぐみさんにはどんな風に見えるんですか？」

「色んな色の光がまとわり付くように動いている。あっ、それが天に向かって伸び始めたわよ」

「そうですね。大体同じように見えてるみたいですね」

「彼、何をしようとしてるのかしら？」

「多分、本来の形での祀りですよ。今、大地のエネルギーを天に向けて伸ばそうとしているんです。此処は、まだまだ太古のエネルギーが残っていますからね。それを纏めて天と繋ぐんです」

「それも神祀り？」

「ええ。めぐみさんの神祀りは神のエネルギーを人に降ろす形ですけど、それと反対に地のエネルギーを天に上げてしまう形もあるんです。そうすることによって、エネルギーが循環する。普通の場所には天に戻す程のエネルギーが無いから、あまりやらないですけどね」

「そうか、此処は天にも匹敵するだけのエネルギーが満ち居てるのね」

アンディは大地のエネルギーを自分の足から吸い上げ、それを両手の平から天に向けて放出し続ける。彼の体は徐々に質感を失い、エネルギーの振動体として其処にある。その振動が時間と共に細くなり、最後には筒状の白色光だけになった。

「彼、あそこまで波動を上げて大丈夫なのかしら？」

「もう肉体は無くなっていますね。あの光が足から消えていくと多分まずいことになると思います」

「彼が何を望んでいるのかが問題よね。そのまま宇宙と一体化してしまうのか、人としての器に戻ろうとするのか。春樹はどっちだと思う？」

正巳の口を使って春樹が答える。「人としての愛を奴が求めていれば戻って来るさ。それにしてもシャオロン、極めたんだなあ」感慨深そうにそう言うと優しく微笑んで見せた。その微笑みで私の中にある不安は払拭された。

「めぐみさん！上の方から白色光がばらけてきましたよ」正巳が言った。

アンディの光は白い筒の上部の方から崩壊し、その光の粒子が周りに広がり始めている。光の筒が短くなるにつれ、その粒子の拡散範囲が広がっていく。上部三分の一ぐらいが崩れた時点で阿蘇中岳はすっぽりと光の粒子に包み込まれていた。私達はその光の粒子の中で歓喜と安らぎの

感情を味わう。

アンディの筒は崩壊拡散を続ける。拡散する粒子は加速をし、半分を過ぎたぐらいで既に拡散の前線が見えなくなるほど遠くまで広がっていた。

「この調子だと九州全土に広がりますね」正巳が言った。

私の首から下げた翡翠の勾玉が、服を通して感じるほど熱くなっている。

「まだまだ足りないわ。この星を包み込まなくては・・・」私は自分の意志とは関係なくそう言いながらアンディの居る方へ歩き始めた。

「姉さん！急ぐな！」春樹の意志で正巳が言った。

「めぐみさん！」正巳がそう呼んで無意識に歩き出そうとする私の体を引き留める。

「私には出来る。今天からのエネルギーを降ろせばこの星を包み込めるのよ」

「龍！まだ早い！この星を包み込んだところで宇宙はまだまだ広い。今姉さんに神祀りをさせたらそこで終わってしまうぞ。今はまだこれだけで充分だ！」春樹が私の内にいる龍にそう叫んだ。

翡翠の勾玉が木っ端微塵となって破裂したあと、私の龍は白い光となって私から離れ、私達に優しく微笑みかけると大きく頷いて見せた。そして、そのままアンディの方へ飛んで行き、後少しになったアンディの光の筒の周囲を回るようにしながらそれと同化した。それによってアンディの光は益々加速し、それまでより更に濃度を増し力強く広がった。

すべてが終わり、アンディは静かな微笑みを浮かべながら私達の方へゆっくりと歩いてきた。

「終わったよ」

「素敵だったわよ」私が言う。

「君の龍が力を貸してくれたね」

「あれで龍は居なくなっちゃったのかしら？」

「僕なら此処に居るさ」アンディの口を使って龍の意識が言った。

「あなた、何をしたの？」私が尋ねる。

「春樹君に止めて貰って良かったよ。あのまま僕が君とともにいたら、君は間違いなく神祀りを完成させてしまっただろう。大地のエネルギーと宇宙のエネルギーを交流させ、すべてのものの波動を上げて行くんだ。そうすることによって、物質は物質であることをやめ、元のエネルギーに戻る」

「それって地球滅亡じゃないですか！」正巳が言った。

「次元上昇だよ。過去何度も人類はそれをやって来たんだ。それが失われた文明の記憶」春樹が私の口を使って言った。

「今回は前の時よりも大規模、つまり地球単位の次元上昇が出来そうだった」アンディの口を使って龍が言った。

「まだ早すぎる。今のまま次元上昇したら、振り落とされる者達が多すぎる。それに、俺はそれを姉さんにさせるのは嫌だ」

「そうだね。春樹君の言うとおりで。まだ人として別れて生まれた意味を理解しきれていない人が多すぎる。だから僕はめぐみを離れたんだ。それで久しぶりにエネルギー浴が出来た。この男の作ったエネルギーの場はなかなか気持ちよかったよ」

「私は、本当にあのまま神祀りを完成させようと思ったのよ。やり方なんて知らないけど、きっと出来るって思ったもの。それで龍と繋がろうとしたら春樹が止めてくれた」

「姉さんに言ってもどうせ聞かないから、龍に言ったのが良かったんだな。姉さんより龍の方がずっと聞き分けが良いってことだ」春樹が正巳の口を使ってそう言い終わると、いつものよう

に私の頭を掴んで揺すった。

「僕は何がなんだか判りませんよ」正巳がふくれっ面で言う。

「私だって何も判ってないのよ。ただ、何かをしたって言う衝動に駆られて、それをするためには龍の助けが要るって思っただけ。もしかして龍ってその時のために存在してるんじゃないの？」

「そうじゃないさ。いや、確かに僕の役目としたらそうなんだけど、僕もめぐみのことを愛してるんだ」

「龍の愛ってどんなものなんですか？」正巳が尋ねる。

「私は知ってるわよ。知っていると言うより、今此処で理解した。龍は私の本当にしたいことが出来るようにいつも力を貸してくれているんだわ。だから、私が神祀りをしたければそれが出来るように導いてくれる。だけど、今の私はまだ人として楽しみたかったのよ。それで龍は私を離れた。そうでしょう？」

「正解だ。やっと君は本当に君のしたいことを理解したみたいだね。僕はいつも君の中において、何度も何度も君の神祀りを手伝ってきた。でも、その度に君はもう一度やり直そうとして生まれ変わったんだ。きっと君にはもっと知りたいこと、楽しみたいことが残っていたんだろうね」

「それが人として愛すること。愛し合うことだったのか・・・」私は確認するように呟いた。

今度は正巳が私の頭を掴んで揺する。「またぁ・・・」私はいつものように不満の表情を作って彼を睨み付けた。正巳はとても素敵に笑うと私の肩に腕を回して言う。「ほら、綺麗な火口を見て、山を下りましょうよ」

私達三人は、火口の遊歩道を歩き、火口湖のエメラルドグリーンの水をのぞき込んだり、アンディのエネルギーが行き渡ったとびきりクリアな景色を堪能した。何もかもが真っ新のように輝き、新鮮なエネルギーに満たされているようだった。

「あなた、磐龍彦さんと何を話したの？」ロープウェイで山頂を降り、車に乗り込んだ私がアンディに向かって尋ねる。

「たいしたことは話してないよ。ところで次は何処へ行くんだい？」アンディが言う。

「一宮の阿蘇神社ですよ。さっきロープウェイ乗り場の横にあったコンクリート造りの神社の本宮です」正巳はそう答えて穏やかな表情で阿蘇の枯れ草色の景色中に、車を走らせた。

何もかもが美しい。それは命在るものも無いものも、形あるものも無いものも、自然の物も人が作ったものも、そのすべてが固有の振動を持ち、それぞれがそれであることを喜んでいる。

アンディが拝殿の前で光り輝いている。

肥後国一宮阿蘇神宮。美しいカーブを描く二段になった屋根を持ち、大きな額が掛けられた門を潜ると、立派な拝殿があり、横長な境内がその前にある。

先に参拝を済ませた私と正巳は、参拝しているアンディを後ろから眺めていた。

「なんだか嬉しそうね」私が言う。

「磐龍彦でしたっけ？その名前で居た時に何か良いことがあったんじゃないかな？」正巳が言った。

「さあ？」私はそう言って首を傾げて見せた。

アンディが参拝を終え、振り向いて私達の方へゆっくりとやってくる。

「めぐみ、色んな事があったんだね。此処の神がそれを語ってくれたよ」そう言って彼は力強く私を抱きしめる。正巳はそんな彼を不思議そうに見ている。

私は彼の腕の力強さと、胸の暖かさから彼の思いが伝わってくるのを感じていた。

「大変だったけど楽しかったのね」私が言う。

「はい。あの頃のように生きられたらどんなに素晴らしいだろう」そう言ってウインクして見せた。そして正巳に向かって「君もめぐみも本当に素晴らしい」と言った。

「何が見えたんですか？」

「この国が出来た頃の事さ」アンディはそう言って正巳をも抱き寄せた。

「僕も居たんですか？」

「もちろんさ」

私達は阿蘇神宮参拝を終え、正巳の運転する車に乗り込む。

「此処より先に在った場所へ行きたいんだけど・・・」アンディが言った。

「一宮より先ですか？」正巳がそう言って地図を広げる。

「多分北東の方向だと思うんだけどな」アンディが目を閉じて何かを読みとるようにして言った。正巳は地図を見ながら「国造神社って言うのがありますけど」と言う。

「土地の名前は？」

「手野ですね」

「其処だ。其処へ行こう」アンディがそう言って、正巳はそれに頷くと車を発進させた。

「アンディ、磐龍彦ってどんな神様だったの？」私が尋ねる。

「この国を作った神だよ。あの火山の火と火口に溜まっていたグリーンの水。それに名前を付けたのが磐龍彦。でも、その名前の人もやはり神だ」

「あなたの随分昔の名前なのね」

「はい。次の神社へ行ってみるともう少し詳しく判ると思うよ」アンディはそう言うと後ろの席にいる私に微笑んで見せた。

私達は細い田圃の間の道を走り、人家の庭先のような道を抜け、小高い丘に立つ国造神社へ着いた。階段を登ると正面に簡素な作りの拝殿が在った。右手の方には朽ちかけた大きな杉の木がご神木として祀られている。

「ご祭神はハヤミカタマの命。磐龍彦の息子って言う事そうですね」正巳が由緒書きを読みな

がら言った。

「君は何か思い出さないかい？」アンディが正巳に優しい声で問いかけた。それに正巳は首を横に振ってみせる。

「あなたよ」私が正巳に言う。正巳が驚いて振り向く。

「あなたの魂が此処に繋がっているの。此処というか、此処に祀られている人。春樹、あなたそれを知ってて阿蘇で式を封じたんでしょ」

「いや、此処に来るまでは知らなかった。俺だって、何もかも判ってた訳じゃないんだ。それに、あの時にはそれを知る必要がなかったからな」春樹が正巳の口を使って答えた。

「そう言うものなのね」私が納得する。

「それで僕が此処に祀られているってどう言うことなのかちゃんと教えて下さいよ」正巳は興味津々な顔で尋ねた。

「大昔、此処の集落が出来たばかりの頃の事よ。この九州のいくつかの勢力と、出雲が戦った頃の話し。出雲にはスサノオという大王が居た。スサノオには五人の息子と三人の娘が居たの。その息子の中の一番下が大歳。スサノオの大王としての資質をすべて受け継いだ大歳は、スサノオのお気に入りでもあったのよ」

「それがあの春日で会ったニギハヤヒ」正巳が言う。

「ずっと若い頃の話ね。そう、今のあなたより若い。二十歳になるかならないかぐらいかな？父親の補佐をしながら大歳はこの辺りにも遠征してきたの。スサノオは、とても強かったけど戦うことは本当はあまり好きじゃなかったみたい。まず、その集落の首長とお酒を飲んで話し合う。それでお互いの利益に結びつく形で折り合いをつけたわけ。もちろん、出雲族の強力な武力がバックにあるから、スサノオの方が有利であったことは確かだけどね。その方法の中で一番ポピュラーなのが結婚形式。その時代一夫一婦制なんて無いし、現地妻みたいな感じで結ばれて、子供が出来たらその子を其処の王にするの。もちろん、あのスサノオのことだから、きっとそういうの大好きだったでしょ」

「もしかしてその子供が僕ですか？」

「そうそう、でもスサノオの子供じゃなくて大歳の方ね。だけど政略結婚じゃないわよ。大歳と此処の姫の自由恋愛。大人達は本当に驚いたわよ。特に私なんかもうどうしようかって・・・」

「私って、めぐみさんは誰だったんですか？」

「フッフッ、それがヒミコよ」私は遠い記憶をたぐり寄せながら話しているうちにその時の感情を思い出していた。

「ヒミコって、あの魏志倭人伝の？」正巳が驚いて言う。

「そうじゃないわ。あの卑弥呼は太陽の日を祀る巫女。私の場合火山の火を祀る火の巫女」

「そうさ。めぐみは、僕の妹」アンディが言った。そして少し悲しそうな顔で続ける。「でも、大歳を追いかけて行ってしまった・・・」

「ごめんなさい」私は素直に謝る。

「それって大歳がニギハヤヒで、ニギハヤヒを追いかけて行ったって言うことですよ。そうか、それで事代主・・・。巫女だったら神の声を聞ける。じゃあその時も僕の母親だったんですか？」

「それがそうじゃないのよ。ねえ春樹！」

「いやあ・・・、申し訳ない。姉さんの妹がなかなか可愛かったもので」

「え～っ、またその時も二股かけてたわけですか？」正巳が言った。

「そう言うな。あの頃は、そんなに珍しいことでもなかったんだ」春樹は今度は私の口を使っ

て言った。

「そうよ。その当時は父親が姉妹を一緒に差し出したの。コノハナサクヤ姫とイワナガ姫の話って知ってる？」私の問いかけに正巳が首を横に振る。

「簡単に言ってしまうえば父神が二人の娘を差し出したのよ。でも、姉のイワナガ姫があまりにも醜かったから一人だけ帰ってしまったって言うお話よ。昔っから男って美人が好きなのね」

「まさかそれがめぐみさんって言うんじゃないでしょうね」正巳が言う。

「まあ失礼ね！それは春樹に尋ねてみてよ」

「いや、醜くは無かったけど、恐かった。あの時の姉さんはやっぱり人を越えてたからな。迂闊に近寄れない雰囲気だった。俺は姉さんに心を引かれながらも、妹の方が手を出しやすくて・・・」

「だって生まれてからずっと巫女になるために育てられていたんですもの。私、妹に大歳の子供が出来たって知ったとき、生まれて初めて人としての感情を持ったの。悔しくて悲しくてどうしようもなかった・・・」

「ウォンさんはその時どうしたんですか？」

「国のために父は僕の妹二人をスサノオに差し出した。でも、スサノオではなく僕と年の近い大歳と結ばれてしまったんだ。親子ほど年の違うスサノオなら、諦めもついたんだが」

「諦めるって、磐龍彦にとっては妹でしょう？」

「母も違うし、巫女として育てられた妹とは一緒に暮らしたこともない。ただ、神祀りの時に僕がサニワとしてずっと付き添っていたんだ。確かに他の人に向かってはとても近寄りがたい雰囲気を作ってはいたが、僕にとってはとてもチャーミングな女性だったんだよ」

「そうそう、恐かったのは最初だけだった。外に見せている顔と、本当の顔は全く違ったからな。あの時の姉さんはまるで子供のままだった」春樹が言った。

「何もかもが生まれて初めての体験だった。あの時の私、自分の年さえも知らないで育ったのよ。必要のないことは何一つ教えられなかった。だから人を好きになったのも、嫉妬心に身を焦がしたのも、いろんな物を欲しがったのも、すべて大歳が教えてくれたのよ」

「それでどうなったんですか？」

「それは・・・、いつものように泥沼よ。大歳はスサノオに輪をかけたぐらいの女ったらし。でも、どの姫にも優しくかった。それに国を造り、それを大きくすると言う意志が強かったの。私は大歳を追いかけて大和へ行った。大歳は受け入れて愛してはくれたけど、ずっと傍には居てくれなかった。それで結局最後は一人寂しく死んだのよ」

「色んな事に忙しかったからな」春樹が言った。

「僕は、結局此処に居続けた。妹の産んだ子供を我が子として育て、此処の王を継がせたんだ。それが五十嵐君だ。あの時僕も火巫女を追いかけていけば、随分違う結果だったんだらうな」アンディが優しく私の顔を覗き込んで言った。

「それで、やり直そうなんて言うんじゃないでしょうね」正巳がアンディを睨み付けて言う。

「おお恐い。君のめぐみをとろうなんて思っていないよ。でも、それが運命なら従うしかないけどね」

正巳は黙って首を振って見せた。

「でも磐龍彦のアンディは此処で楽しく暮らしたんでしょう？さっき大変だったけど楽しかったって・・・」

「そうだね。此処には此処の楽しみもあった。確かに僕の恋は実らなかったけど、土地を切り開いて治め、跡継ぎを育て、それなりに楽しいことがいっぱいあったよ」

「その後誰とも結ばれなかったの？」私が尋ねる。

「いや、何人か子供も持ったよ。だけど、跡継ぎはハヤミカタマに決まっていた。それが政略結婚の意味だからね。それに何故か僕には女の子しか出来なかったから、結局僕の娘とハヤミカタマが結婚して上手く治まった」

「そう、じゃあ正巳の育ての父でもあり義理の父親でもあったわけだ」

「初めはヒミコのことがあるって、ハヤミカタマを育てるのに蟠りがあったけど、生まれたての赤ん坊には罪はない。妹の産んだ子供でもあるし、育てていくうちに愛情も湧いた。それに成人してからは私のことを敬い、姫も大切にしてくれた。ハヤミカタマは父親譲りで良い男だったよ」

「アンディは大歳が嫌いじゃなかったの？」

「憎い相手ではあったけど、王としても男としても魅力があった。それでなければ、あれだけの国を治めることは出来なかっただろう。スサノオも素晴らしい男だったが、大歳もまたスケールの大きな素晴らしい王だった。大歳は父親スサノオの国を継いだ訳ではなく、自分の力で大和の王となり、その領土を拡大したんだ」

「そう、色んな女性と結ばれることが領土の拡大に繋がるんですもの、あなたにとっては最高の生だったんじゃないの？」私は自分の内に居る春樹に向かって言った。

「そうでもないさ。ずっと満たされない思いを持ち続けて居たからこそ次へ進めたんだ。それに恋愛においては、男も女も同じだけ悩むのさ」春樹が私の口を使って言った。

「偉そうに・・・」

「それだけ判ったら此処はもう良いですか？」正巳が二人に向かって言った。

「そうだね。僕は此処で生きていたことがある。そして、今此処にいる人達と一緒にいた。それはとても素晴らしい一生だった。それで良い」

「本当ね。きっとあの時色んな思いや辛さがあっただろうけど、今はその時が幸せな一生だったって判る。それって本当に素晴らしい事よね」

「ねえ、五十嵐君。僕はもう一度この土地を見渡してみたいんだけど」アンディが言う。

「判りました。じゃあ大観峰へ登りましょう」正巳がそう答えて車に向かって歩き始めた。

車は、中岳を左手に見ながら壁のように見える台地に向かって走る。

「アンディ、ごめんなさい。あなたに貰った翡翠が・・・」私はひもだけになってしまった首飾りを見せる。

「構わないよ。その為にめぐみに渡したんだ。翡翠は古来より神を降ろすための道具なんだ。だからあのエネルギーの振動と共振し、形を失っただけだよ。ほら、その先をよく見てごらん」

私にはそう言われても何も見えない。

「ほら、目を閉じれば見えないかい？」

私は言われたように目を閉じる。するとそこにあった。物質としての翡翠よりも数段美しく輝くエネルギー体としての勾玉。

正巳が運転しながら言う。「めぐみさん、それ死返しの玉ですよ。それをもってフルベフルベと唱えれば、死んだ人も蘇るはずですよ。といっても梶さんは無理。今の梶さんの状態が蘇った状態ですよ。肉体じゃなく魂にエネルギーを与える事が出来るんです・・・と言うよりも、その玉が魂と共振する事によって力が出るといった方が良いですかね」

「そうか・・・。すべてがエネルギーの共振なのね」

「その勾玉、大切にすると良い」アンディはそう言って笑って見せた。

車は街を抜けた後くねくねと曲がりながら山を登り、枯れ草色の草原に出た。

正巳は大きな駐車場に車を止めた。「外は寒いですよ。暖かくして降りてください」

私はジャケットを着込み、ストールを持って車を降りた。

「わーっ、寒い」快適な温度に暖められていた車を降りると、寒さが身にしみる。正巳が私のストールを取って後ろから私に巻き付けて言う。「風邪引かないで下さいよ」

私達は、緩やかな坂道になった遊歩道をゆっくりと歩く。五分ほどで展望台に出た。

「すっ、凄い！」私とアンディが声を揃えて言う。

目前に今朝登ったばかりの、噴煙を上げる中岳が見え、左前方に特徴的な形の根子岳を含む阿蘇五岳が望めた。今自分達がいる場所と阿蘇五岳の間がまるで池のように窪んでいる。水がないのが不思議なぐらいだ。

「此処に来るまでに随分登ったから、山に来てるって思ってたのに、さっきまでいた場所が窪んでいたのね」

「阿蘇のカルデラの中に居たんですよ」正巳がそう言って笑って見せた。

「太古、此処は湖だった」アンディが言う。

「じゃあ、いつからこうなったの？」私が尋ねる。

「さあ？大昔だからね。でも、此処の水を抜いたのは僕だよ」アンディが風景を見ながら言った

。

「ウォンさんがですか？いったいどうやって？」正巳が驚いて言う。

「簡単な事さ。僕はあの火の山。そしてその噴火によって水を湛えていた堤防を切った。それだけさ」

「そう……。磐龍彦ってそう言う神様だったのね」

「はい、あの火の山が此処の神。中岳に登ったときは、その火の山としての神と繋がった。そして、阿蘇神社へ行って人としての神とも繋がった」

「火の山の神と人としての神か……。確かに神って両方あるわね」

「どういう意味ですか？」

「神って言うのは、人が作るものなんだ。それは長い時間をかけて大勢の人々が神を崇め続けることによって力を持つ。崇める対象が人であれば人としての性格を持った神になる。それが自然物であればその特徴を持った神になる。つまり人が神を作り出すんだ」アンディが言った。

「でもね、何故それが出来るか判る？」私が正巳に尋ねる。

「もちろんですよ。人が神だからです」

「素晴らしい！」アンディはそう言って正巳を抱きしめた。

柊の花・・・ 8

「めぐみさん、僕はヒミコだっためぐみさんの息子だった訳じゃないんですよねえ」

九州から帰ったあと、私の部屋でウイスキーを飲みながら正巳が言った。

「そうね」私も薄い水割りで正巳に付き合っていた。

「でも、春日の大神であったニギハヤヒに僕のこと息子だって言ってましたよね」

「そう、あの時のニギハヤヒは春日の神だったから」

「よく分かりません」

「要するに前世って一つじゃないのよ。そして時間が規則正しく流れているわけでもない。同じ人の記憶を何人かで持っていることだってあるのよ」

「そう言えば、神祀りの為のニギハヤヒも居ましたね」

「そうよ、ニギハヤヒと菅原道真は同じ魂を受け継ぐものとして生きたけど、春樹とアンディの様に違う人間として肉体を持ったりもしてる。そしてその前世の記憶を蘇らせたとしても、その通りの感情で動くわけでもない」

「そうみたいですね。なんだか、前世というものって、ただの素材みたいな気がしてきましたよ」

「そうよ。いろんな素材を持ってきて、それをどう料理するかが、今生の楽しみなんじゃないかしら？」

「そう言えば、ヒミコの妹の子供として僕が居たんですよ。そして、トヨツヒメの時は実子にも関わらずお姉さんが僕を育ててくれた。その後は僕を産んですぐに死んじゃったわけでしょう？」

「そうね」私は空になった正巳のグラスにウイスキーを注ぎながら相づちを打つ。

「めぐみさん、今回の生は、僕のこと大事にした方が良いでしょう。初めてちゃんと僕を育ててる訳なんですから」そう言って注いだばかりのグラスを口に運ぶ。

「そうみたいね。私のやり残した最後の仕事が、あなたを育てることだったのかも。でももうその仕事も終われるわ。だって、あなた充分に良い男に育ったもの。春樹がちゃんと育ててくれて、私が最後の楽しいところだけ貰ったみたい。あいつ、さすがに死んでるだけあって嘘はつかなかったわね」私はそう言って笑って見せた。

「死んだ人は嘘をつかないんですよ。でも、もう少し一緒に楽しみましょう。出来ればこの一生をずっとめぐみさんと一緒に居たい。今までの母子だった前世の素材を、夫婦や愛人という形に料理したって良いわけですから」

「わっ！とうとう愛人枠が出来たのね。とにかくなるように成って行くわよ。それに、あなた本当に良い男になったわ。これからもててもててしょうがないかもよ。春樹の分まで沢山愛すると良いわ。やり方はずっと見てたから知ってるんでしょう？」

「そうですね。でも、めぐみさんはそれで悲しい思いをしたりしないですか？」

「春樹みたいに上手に愛しなさい。彼は誰も悲しませなかった」

「でも、僕、ちょっと寂しいときがありました。特に最後の頃・・・」

「そう、寂しさは仕方ないわね。体は一つだもん。結局ヒミコだった私も最後は寂しかったのよ。それでとうとう今みたいにずっと一緒にいられる形として、春樹を私の中に取り込んでしまったのかも知れないわね」

「俺もそうさ。ずっと傍に居てやりたかったのにそれが出来なかった。それが辛くてこんな形に

変化してしまったんだ」春樹が突然正巳の口を使って割り込んできた。

「傍に居てやりたかっただけじゃないでしょう？あなたも寂しがり屋で、いつも傍に誰か居て欲しかったんじゃない」私が正巳の中の春樹に言った。

「そうだな。人はみんな寂しいんだよ。だから人と繋がり合おうとしてるんだ。特に愛するものと一緒に生きていたいと思う。五十嵐、一緒に生きるってどう言うことか判るか？」正巳の口を使って春樹が正巳に問いかけた。

「多分・・・、同じ現象を同じように楽しむって言う事じゃないですか？」

「大正解！正巳あなた本当にそろそろ卒業しても良いわよ」

「いえいえ、これでやっと吉野さんやウォンさんと同じスタートラインに並ぶ資格が出来たって事でしょう？一番手強い梶さんは死んじゃったし、これからが勝負ですよ」正巳はそう言ってとても素敵に笑って見せた。

作者あとがき

不思議な物語、いかがでしたでしょうか？

この長い物語を、根気強く読んでくれた方々に心から感謝いたします。

今の段階では、この最後の章がとても気に入り、此処で語られていることが、この物語全体で語ろうとしていた大切な事のような気がして、此処でひとまずこの物語を終わろうと思います。

またいつかこの先の物語りが降りてくるようなことがあれば、まだまだ書き続けてみたいような気がします。何故なら此処に登場してきた人物達が私にとってとても魅力的であるからです。

また、この人物達と旅をしたり、愛し合ったり出来る日が来れば幸いです。

読んで下さった皆様、そしてわざわざ感想を聞かせて下さった皆様、本当に有り難うございました。

2003年6月4日 naomi

柊の花

<http://p.booklog.jp/book/79650>

著者：naomi

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nekokiri/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/79650>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/79650>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ